



日本玉代一覽

四

リ伊5  
1,088  
4



伊予門  
1088  
卷 4

皇極經世一  
皇極經世二  
皇極經世三  
皇極經世四  
皇極經世五

日本正代一覽卷之四目錄

一葉 後三條院

在位四年

延久四  
森鴻次郎氏寄贈

二葉 白河院

在位十四年

自延久五承保  
三。承曆四。末保  
二。應德三。

五葉 堀河院

在位廿一年

寬治七。嘉保二。  
末長一。承德二。  
康和五。長治二。  
嘉承二。

七葉 鳥羽院

在位十六年

天仁二。天末三。  
末久五。元末一。  
保安四。

十三葉 崇徳院

在位十八年

天治二。大治五。  
大承一。長承三。  
保延六。末治一。

明治廿五年十一月廿七日

近衛院

在位十四年

康治二。天養一。  
久安六。仁平三。  
久壽一。

後白河院

在位三年

保元三

一條院

在位七年

平治一。承和四。  
應保二。長寛二。  
末萬一。

六條院

在位三年

仁安三

高倉院

在位十二年

嘉應二。承安四。  
安元二。治承四。

安徳天皇

在位三年

養和一。  
壽永二。

後鳥羽院

在位十五年

元暦一。文治五。  
建久九。

日本王代一覽卷之四

七十一代



後三條院

後朱雀院第二子。諱公尊仁。後冷泉

院ノ別腹ノ弟ナリ。母ハ陽明門院禎子ト云三

條院ノ娘。父方母方ニテ。冷泉園融ノ一流ヲア

ハセテ相續セラル。寛徳二年正月十六日。後朱雀

院御惱ニヨリテ。位ヲ後冷泉院ニ讓ル。其時大納言

藤原能信御前へ參下。下宮尊仁ヲ公僧ニナシ。ヒ

ラセラル。カト申ス。後朱雀院闈召テ。此次ノ東宮

ニ立ヘシト仰ラル。能信シカラハ早ク御定メアルベト

申ス。後朱雀宣ヒケル。東宮ノ定ハ遲カラサルコト

ト。關白頼通申共。重テ其沙汰アルヘシ。能信シハ今

日ノ中ニ仰出サレ然ルベシトテ。即チ決定シ後冷泉  
院ハ即位シレニ。尊仁ハ十二歳ニテ。東宮ニ立タ  
マフ。能信ヲ東宮ノ大夫トス。後朱雀ハ程十ク崩御  
アリシカドモ東宮ハステニ定ルユコト十九事ナリ能  
信ハ頼通ガ弟ナリ。治暦四年四月後冷泉院崩  
御尊仁即位シタマフ。時ニ歳三十五此帝東宮ニアリ  
シ時ヨリ。大江匡房トイヘル博學ノ人ヲ召テ學問ニ  
タマフ。又天台真言ノ佛法ヲモキ、タマフ。藤原頼通  
ハ後一條院ヨリ以來。三代ノ間攝政關白ニシテ。天  
下ノ政ヲ執コト五十年ニ及ブ。帝東宮ノ時ヨリ。  
御不快ナルユヘ即位ノ後。頼通上表シテ治ノ別墅  
ヘ引籠ル其弟左大臣教通ヲ關白トス。頼通ガ子右

大臣師實ト内大臣源ノ師房ト。左右大將ヲ兼ス。帝サカ  
シクシシスユヘ初テ攝家ノ權ヲサハ萬機ノ政自ラ決斷シ  
タマフ。其上ニ記録取ヲ立テ民間ノ訟ヲ聞テ其憂ヲ救フ。後  
冷泉ノ末ノ代世ノ中ヲタヤカナラザリシガ此御代ニナリ。一  
年モ過サルニ政正シクテ。人皆悦ブ。

延久元年七月關白教通左大臣ヲ辞シ。師實左大臣  
ニ轉シ。源師房右大臣ニ升リ。藤原信長内大臣トナル。  
信長ハ教通ノ子ナリ。八月石清水賀茂春日行幸。  
石清水放生會ニ此代ヨリ初テ宰相諸衛ノ佐ナト遣  
サル。其儀式嚴重ナリ。同月御母陽明門院ヘ朝觀  
行幸。

同二年三月教通太政大臣ニ任ゼラル官職タカレシム。

トモ其威權公父兄ニ劣レリ 十一月平野北野へ行幸  
十二月圓宗寺ヲ造テ供養ノ日行幸アリ  
三年正月稻荷祇園へ行幸 八月新造ノ内裏へ渡御  
應賀ノ儀式嚴重ナリ 十一月初テ日吉ノ社へ行幸  
此年奥州ノ夷賊ヲコル陸奥守源頼俊是ヲ討平ク  
四年十月圓宗寺へ行幸ニ井寺興福寺ノ僧問答アリ  
十二月天皇位ヲ東宮貞仁ニ讓ル 在位四年 年号  
延久

七十二代

白河院 後三條院ノ第一ノ御子諱ハ貞仁母ハ贈皇  
后藤原茂子ト云中納言藤原公成ガ娘ナリシヲ大納  
言能信養テ後三條ノ東宮タリトキ御息所ニシテ天

皇ヲ産リ

延元元年四月東宮ニ立  
同四年十二月讓リヲウケテ即位時ニ二十歳後三條  
ヲバ一院ト申ス  
延久五年四月後三條へ朝覲ノ行幸アリ 五月七日  
後三條院崩ス歳四十一。此院累代攝家ノ戚ヲサヘ  
テ專ラ心ヲ政務ニカクルユヘ帝位ヲ讓リ院中ニテ方機  
ヲ沙汰セントノ心アリトイヘトモ幾程ナク崩御アリト  
カレトモ其ヲキテニヨリテ。此帝歳ワカレトイヘトモ直  
ニ政ヲ聞召テ關白教通眞職ヲ守ルノ事ナリ 同月外  
祖藤原能信ニ太政大臣正一位ヲ贈ラル  
承保元年正月大納言源隆國七十一歳ニテ致仕ス此

人宇治ニ閑居シ來訪フ者ニ昔ノ物語ヲサセテコレヲ  
書集テ草子トス宇治大納言ノ物語トテ今ニ傳レリ  
二月七日前關白藤原頼通薨ス歳八十三。同キ比其  
姉上東門院彰子モ崩ス歳八十七。一條院ノ后ナレハ  
當今ノ曾祖母ナリ

二年九月關白藤原教通薨ス歳八十 十月左大臣  
藤原師實關白トナル 十一月春日行幸

三年十月嵯峨野へ遊獵大井川ノ紅葉ノ御歌アリ  
承暦元年正月右清水賀茂平野大原野ノ行幸アリ

二月右大臣源師房病瘡ノ病ニテ薨ス歳七十。其臨  
終ノ時太政大臣ニ任セラルノ仰アリ。此大臣父具平親  
王ノ跡ヲ繼テ倭漢ノオアリ。其作レル記録アリ 同月

日吉行幸

二年四月二一八日殿上ノ歌合大納言源頭房判者  
タリ。天皇詩歌ヲ好ム藤原通俊藤原頭季源俊頼十  
ト倭歌ヲ以テ名ヲアラハス藤原實政藤原敦光十ト  
イヘル博士數輩詩文ヲ以テ世ニ稱セラル大江匡房ハ  
詩歌共ニスグレ中納言源經信ト云シ人。詩歌管絃相  
ニ達セリ

三年十月稻荷祇園行幸

四年八月内大臣藤原信長ヲ太政大臣トス大納言藤  
原俊家右大臣トナル信長ガ兄ナリ藤原能長内大臣トナル能長  
カ子ナリ此時關白師實公左大臣タリトイヘトモ太政大臣  
信長ガ上ニ位ス 同年二月高麗國王病ニヨリテ王

則貞ト云ル商人ノ便船ニ書簡ヲ太宰府ヘ贈リ日本  
ノ名醫ヲ求ム。此時丹波雅忠ト云ル醫師治術ノダシテ  
其名異國ニテモ聞ヘケルニヨリテ。彼國王ノ疾ヲ療セン  
コトヲ求ム并レトモ朝廷僉議アリテ。雅忠ヲ遣ヒス其  
返簡ハ大江匡房コレヲ作ル

永保元年二月興福寺ノ僧ト多武峯ノ奴トイサカヒ  
テ。興福寺ノ僧ウタレケレバ。衆徒等大キニ怒テ。多勢  
ヲ催シ。多武峯ヲ燒破ル。六月比叡山ト三井寺ト  
不和ニテ合戦ニ及ヒ。三井寺悉炎上

二年十月右大臣俊家薨ス。歲六十四。十一月内大臣  
臣能長薨ス。歲六十一。同日源賴義卒ス。歲八十八。  
十二月大納言源俊房右大臣トシ。師房カ子藤原道

長カ外孫ナリ

三年正月。關白師實左大臣ヲ辞シテ。源俊房左大臣  
轉シ。其弟頭房右大臣ニ升リ。師實カ子師道内大臣  
トス。二月仁和寺ノ御室性信一品ニ叙ス。皇子ノ僧  
トナリテ。位ヲ賜ルコトヨリ初ル。十月法勝寺ヲ  
建。九重ノ塔ヲ作ル。此寺ノ結構先代ノ御願寺ニ超越  
スルニヨリテ。此以後代々ノ御願寺。弥廣大ニシテ世ノ  
ツイヘトナレリ

應徳元年九月中宮賢子崩ス。天皇甚歎テ。政ヲシハラ  
クサレヲク

二年五月沙門增譽ヲ内裏ヘ召ニ。法華經ヲ傳受セ  
ラル。天皇コレヨリ。弥佛法ヲ好ミ。故中宮賢子追善

ノタメニ伽藍多ク作り宸筆ニ經ヲ書タニフコト多シ  
三年十一月位ヲ太子善仁ニ讓ル太上天皇ノ尊号ヲ  
奉ル始即位ノ翌年先帝ノ年号ヲ改メス延久五年  
ト稱ス其次ニ承保三年 承曆四年 永保三年 應  
德三年合テ在位十四年

七十三代

堀河院 白河第二ノ子諱ハ善仁母ハ中宮賢子ト云  
右大臣源頭房カ娘ナリシヲ關白藤原師實養テ入内  
セシム承曆二年ニ誕生應德三年十一月白川ノ讓リヲ  
受テ即位時八歳師實攝政シカレトモ白河太上天皇始  
テ院中ニテ萬機ノ政ヲ行フ白河ニ御所ヲ造リ又鳥羽  
ニ御所ヲ造テ城南離宮ト号ス天下ノ事大小トク皆

院御所ノサハキニテ禁中モ攝家モ名アリテ實ナ  
天皇成長ノ倭歌ヲ好ム源俊賴藤原基俊ナトシ其道  
ニ名アル者常ニ伺候ス周防内侍伊勢太輔ナト云ル内裏  
ノ女房モ歌ヲ詠スル者多シ又管絃郢曲ニ達シタニヒ殊  
ニ能笛ヲ吹タマフ時元トイヘル者ヲ召テ笙ヲ吹レメテ  
聞召サレ

寛治元年五月白河太上天皇宇治へ御幸  
二年正月院御所へ朝觀行幸 二月上皇東大寺興  
福寺へ御幸ソレヨリ高野山へ登リタニヒテ弘法影堂  
ヲ開テ拜セラレ 十月比叡山御幸 十一月太政大  
臣信長致仕七六十一 十二月攝政師實太政大臣ニ任ス  
三年五月上皇叡山へ御幸中堂ニ一七日止宿



十二月近江ノ彦根山へ御幸

四年正月。上皇熊野御幸。十月。清水寺へ行幸アリ。

一七日止宿シタニテ。十二月。師實攝政ヲ辞シテ。

關白トナリ。

五年正月。院ノ御所へ朝覲ノ行幸。四月。前齊院篤

子入内シ。中宮ニ立ラル天皇ノ叔母ナリ。今年冬。源義

家奥州ニテ。清原武衡家衡ヲ討平ク。初後冷泉院ノ

御宇。義家其父頼義ニシタカツテ。貞任宗任ヲ平クル

時。義家出羽守ニ任ス。任ヲワリテ歸京ス。頼義カ貞任

ヲ討キ。清原武則軍功アルヲ以テ。鎮守府將軍ニ任シ。

威ヲ陸奥出羽ニ振フ。其子二人アリ。兄ヲ武衡ト云。弟ヲ

家衡ト云。武則カ跡ヲ相續ス。貞任カ黨類。藤原經清

ト云モノアリ。秀郷カ後胤ナリ。其子ヲ清衡ト云。經清

貞任ト同時ニ誅セラレシ。其妻荒川太郎武貞ト云モノ

ニ嫁ス。清衡モ武貞ガ子トナリテ。其跡ヲツク。武貞武

則ガ子弟ナルベシ。或ハ經清ガ妻ヲ武則奪取テ。其腹ニ

家衡ヲ生ルニ。清衡ト家衡トハ種カハリノ兄弟ナリトモ

云リ。武則死シテ後。武衡家衡ト。清衡ト相論ノコトアリ

テ不和ナリ。然ルトコロニ。永保二年ノ比。カトヨ義家鎮守府

將軍陸奥守ニ任セラレテ。下向ス。清衡出迎テ。武衡モ異

義ナシ。家衡出羽ニアリテ。從ハス。義家出羽ノ國へ入ル。家

衡是ヲ防テ入ス。義家シバラク奥州へ歸ル。武衡始ハ奥州

ニアリテ。家衡ガ策ニ從サリシカ。其既ニ義家ヲ逐歸スコ

トヲ聞テ。義家ホトノ名將ヲモギテ。國中へ入サルコトハ

武士ノ面目ナリトテ。遂ニ同心シ。奥州ヨリ出羽へ赴キ家  
衡ト一所ニ仙北金澤ノ城ニ籠ル。其後義家ノ弟新羅三  
郎義光兵衛尉ニテ禁中ニ宿直セレガ。奥州ニテ合戦ノ事  
ヲ聞テ御暇ヲ申ストイヘトモ勅許ナキニヨリテ。夜中ニ  
出奥州へ下向ス。義家悦テ父頼義ノ再來ルガコトシトテ。  
コレニカラ得軍兵ヲ聚。金澤ヲ攻ム。鎌倉權五郎景政十  
六ニテ先陣ニ進テ左ノ眼ヲ射レナカラ。矢ヲ放テ其敵  
ヲ射殺ス。其外三浦爲次伴助兼ナト云兵トモ軍功ヲ  
勵ス。毎日ノ合戦ニ甲乙ノ座ヲ定ム。剛ナル者ヲハ申ノ座ニ  
居レモ臆ナル者ヲハ乙ノ座ニ居レモ藤原丞ノ方ト云者ニ  
度モ乙ノ座ニツカスアルトキ義家ノ陣ノ前ヲ。鷹行ニ成  
テ。群リ飛ケルガ。タチニ乱テ。四方へ分レ散ケレ。義家

コレハ兵法ニ伏兵野ニアレハ飛鷹行ヲ乱ルト云リ此邊  
武衡兄弟カ兵ヲカクシ置ナルヘントテ。搜リ求ケレ。果  
レテ敵三十餘人。藪澤ノ中ニ在ケルヲ尋出シテ殺ス。此  
兵法ハ義家曾大江匡房ヨリ相傳スル所ナリ。カクテ城  
中猶強ク。寄手モ多ク討レケレハ。義家義光并ニ清衡相  
談ニテ。合戦ヲ止テ。四方ヲトリカコシ。年月ヲ送ル其間  
テ。ノ事アリ。カ。リシ程ニ城中次第ニ兵糧盡ケレ。士  
卒皆飢テ。降参スル者多シ

寛治五年十一月十四日ノ夜。武衡家衡城ニ火ヲカケテ  
落行義家ノ兵乱入テ。悉ク討殺ス。武衡ハ草ノ中ニ面ヲ  
カクシ。池ノ中ニ身ヲヒタシ。隠レケルヲ尋出シ。生捕テコレヲ  
斬ル。家衡ハ身ヲマツシ。賤奴トナリテ。落行レテ。縣小次郎

次任ト云者コレヲ討殺ス其同類張本四十八人皆討レテ  
出羽奥州悉ク平ギス。賴義奥州ノ合戦公承五年ヨリ。  
康平五年ニテ。十二年ナレトモ世ニ前九年ノ合戦トイヒ。此  
合戦モ永保二年ヨリカソフレバ。寛治五年ニテ十年ニ  
及ヘリ。レカレトモ世ニハ後三年ノ合戦ト云傳タリ。其對  
陣ノ内ヲハ除テ合戦ノ間ノ年ハカリヲ取テ云ニヤ。ガクテ義  
家ハ歸洛シ清衡ヲシテ。奥州ヲ守ラシムルニヨリテ。其子孫  
遂ニ奥州ヲ押領ス。義家父子相續シテ。武威ヲ奥州ニ振  
フユヘ。關東ノ武士皆源氏ノ被官トナルハ。眞時ヨリノコト  
ナルヘシ。二十餘人。中ニ五ノ一ノ者。其子孫トシテ。其  
六年七月上皇吉野金峯山ヘ御幸  
七年正月春日大原野御幸

嘉保元年三月。師實關白ヲ辞ス。其子内大臣師通關白  
トナル。然レトモ。レボラシク左大臣源俊房ノ下ニ位ス。此特  
師實五十三歳京極ノ關白ト号ス。師通三十三歳後  
二條關白ト号ス。六月大納言源經信太宰權帥ニ  
遷サレシ。筑紫ニ下。眞時ニ歳七十九。同月參議藤  
原通俊大江匡房中納言ニ任ス。九月右大臣頭房覺  
ス。歳五十八。此人ハ倭歌ニ長セリ。兄俊房公文才ス。ケレ  
リ。頭房ハ今上ノ外祖ナルユ。今上皇コレヲ登庸シ。俊房ヨリ  
前ニ任權セシメント思カレケレトモ。大江匡房諫申テ。先  
俊房ヲ大臣ニ任レ。其次ニ頭房昇進セリ。  
二年四月石清水賀茂行幸。八月天皇瘡疾アリ。僧正  
隆命カ加持ニテ。驗アルニヨリテ。輦車ヲ許サルトイヘリ。

又此帝御惱ノ時源義家内裏ニ候シテ鳴弦シテ邪氣ヲ  
シツムトイヒツタフル公此時ノコトニヤ

永長元年關白師通從一位ニ叙シテ左大臣俊房カ上ニ  
位ス此年夏洛中ニ田樂ト云者ハヤリテ貴賤皆見物ス  
院御所ヘモ召テ御覽マリトナシ 八月上皇落飾隆  
命戒師タリコレヨリ白河法皇ト稱ス此以後モ院中ニ  
テ政務ヲ聞タシラ

承德元年正月大納言源經信太宰府ニテ卒ス歲八十  
二 四月祇園行幸 十月關白師通館へ行幸

二年七月法勝寺行幸 九月中納言大江匡房太宰  
ノ權帥ニ任ゼラレテ下向ス故ニ匡房ヲ江帥ト云

康和元年正月法皇ノ子仁和寺ノ御室覺行ニ親王宣

下セララル法中ノ親王コレヨリ初ル 六月關白師通薨ス  
歳二十八其子大納言忠實ヲシテ太政官ノコトヲ司  
トラシム祖父師實ハ猶存生ニテ大殿ト稱ス忠實ヲ  
養テ子トセリ此時攝家ノ威衰ニ政院中ニ決ス師通  
常ニイキトナリテ本朝ノ先例ヲリイノ帝ノ門ニ車立  
ハヤウヤアルトヘリ師通薨レテ後シハラク關白ノ  
職カケテ白河法皇赤心ノニニ執行ル此時ヨリ天下ノ  
事宣言官符ニ及バズ院宣并ニ院廳ノ下文ヲ以テ施行  
ス諸國コレヲモンジラズト云コトナシ又大中納言  
或ハ參議ノ人ヲエラフニテ院ノ別當ト号シテ院中ノ  
事ヲ執シ其權威甚強シ又北面ノ侍ヲモ始テ置テ  
院中ニ宿直セシメ其外院中ノ儀式モ皆此時ヨリナ

ハレリ

二年七月。大納言忠實右大臣ニ任ス。源雅實曰大臣ニ任ス。雅實ハ頭房ガ子ナリ。同年。源義家ガ嫡男對馬守義親勅宣ヲ背ニヨリテ。出雲國ヘ流罪。

三年二月。前關白藤原師實薨ス。歳六十。四年正月。春日行幸。三月。法皇五十。筭ヲ賀ス。

六月。大江匡房筑紫ヨリ歸京。中納言藤原季仲。太宰ノ帥トナリテ。下向。此人色黒ニヨリテ。黒帥ト号ス。

五年正月。鳥羽離宮ヘ行幸アリテ。法皇ヘ朝觀。長治元年三月。尊勝寺ヘ行幸。八月。禁中ニテ。宸筆ノ法華講アリ。

二年六月。北國紅ノ雲フル。十一月。日吉社ノ訟ニヨリテ。太宰帥中納言藤原季仲。常陸國ニ流罪セラレ。十二

月。右大臣忠實關白トナル。嘉承元年三月。大江匡房再太宰ノ帥トナル。二年。出雲國ノ流入源義親。忠道止ス。謀叛ノ聞ヘアルニヨリテ。平正盛ヲ遣シテ。義親ヲ伐シム。七月十九日。天皇崩ス。歳二十九。年号寛治七年。嘉保二年。未

長一年。承德二年。康和五年。長治二年。嘉承二年。在位合テ二十一年。

七十四代

鳥羽院 堀河ノ第一ノ子諱ハ宗仁。母ハ藤原茂子。關

院大納言實季ガ娘ナリ。康和五年正月ニ誕生。同八月。東宮ニタケタマフ。嘉承二年七月。堀河崩ス。太子五

月。東宮ニタケタマフ。嘉承二年七月。堀河崩ス。太子五

歳ニテ即位。右大臣藤原忠實攝政タリ。然レトモ政務ハ皆御祖父白河法皇沙汰シタリ。

天仁元年正月。平正盛出雲國ニテ。源義親ト戦テ。義親伏誅。初、義親配流ノ時、其子爲義ヲ祖、父義家養テ已ガ子トス。義親カ弟義忠、義家カ家督タルヘシト定ル處ニ。義忠其叔父新羅三郎義光ト不和ナリ。今年二月、義光密ニ鹿嶋三郎ト云者ヲカタラヒテ。義忠ヲ殺ス。義光カ所爲タルコトヲ知ルモノナレ。却テ義光カ兄加茂次郎義綱カレハサナリト沙汰アリケレ。義綱牙實ノ罪ヲ得ルコトヲ怒テ。忽謀叛シ。近江國甲賀山三楯籠ル。爲義時二十歳院宣ヲ蒙テ。行向テ追討ス。義綱戰負テ降参ス。佐渡ノ國ヘ流サル。義家同年病死。歳六十八爲義嫡孫ニシテ。且ステニ養子タルニヨリテ。其家ヲ相續ス。

二年正月。右清水賀茂行幸。天永元年五月。法勝寺ニテ。金字大藏經供養アリ。天皇モ行幸。

二年正月。法皇へ朝覲ノ行幸。七月。大江匡房卒ス。歳七十一。

三年十二月。攝政右大臣忠實、太政大臣ニ任ス。永久元年正月元日。天皇二元服。時二十一歳。四月。忠實攝政ヲヤメテ。關白トナル。八月。松尾北野行幸。

十月。日吉行幸。十一月。相荷祇園行幸。今年比叡山ト興福寺ト。爭論ノ事アリ。興福寺朝家ヲ恨テ。大衆蜂起シ。春。自ノ神木ヲ先ダテ。數千人果

ヲ恨テ。大衆蜂起シ。春。自ノ神木ヲ先ダテ。數千人果

栴山ニテ競來リテ既ニ入洛セントス勅使ヲ遣サレテ宿  
ヲルレトモ聞ズユレニヨリテ源爲義ヲツカハレテ。衆徒ヲ  
防レム衆徒ハ勢トイヘドモ爲義ニ破ラレテ歸ル爲義時ニ  
十八歳其勸賞ニ左衛門尉トナル惣ジニ此比山明有  
都ノ僧甚奢テ武士ノゴトシヤ、モクハ朝廷ヲ恨或ハ日  
吉ノ神輿ヲ振り或ハ春日ノ所木ヲ捧テ京ヘ入テ嘯  
訴スルコトヲホシ

二年十一月法皇白河ノ阿彌陀堂ノ供養行ル

天皇行幸院ノ別當參議藤原爲房正二位ニ叙セラレ

三年四月内大臣源雅實右大臣トナル關白忠實ノ子。

大納言忠通内大臣ニ任ス時二十九歳

五年五月奥州ニ一人ノ僧アリ源義親法師ト名乗テ國

民ヲソ、ナハカスヨシ風聞ニヨリニ義親ハ既ニ伏誅ウタ

カヒナシトイヘドモ萬一遁逃ケルカ擧捕ヘキ旨院宣ヲ奥州

ノ國司ニ下サル

元永元年九月法皇熊野へ御幸 十二月最勝寺供

養行幸アリ

二年八月皇孫有仁源姓ヲ賜テ從三位ニ叙ス有仁ノ父

輔仁親王ハ後ニ條院ノニノ宮ニテ。白河法皇ノ弟ナリ

輔仁能詩ヲ作レリ

保安二年二月忠實關白ヲ辞ス時二年四十四 三月

忠通關白ニ任ス牛車ヲユルサレ隨身兵杖ヲ賜フコト如

例時ニ二十五歳父忠實ノ宇治ニ歸居シテ富家別業ニ

アリ故ニ富家殿ト云 五月叡山ノ衆徒三井寺ヲ燒

十一月左大臣源俊房薨ス歳八十七

三年十二月右大臣源雅實太政大臣ニ任ス關白忠通

左大臣ニ任シ雅實力次ニ位ス大納言藤原家忠右大臣

ニ任ス大納言源有仁内大臣ニ任ス此時家忠有仁左右

大將ヲ兼タリ

四年正月二十八日天皇位ヲ御子顯仁ニ譲ル太上天

皇ト号ス時ニ纔二十一歳年号天仁二年天末三

年末久五年元末二年保安四年在位合テ

十六年

七十五代

崇徳院

鳥羽第一ノ御子ナリ諱ハ顯仁母ハ中宮藤原

璋子待賢門院ト号ス大納言藤原公實カ娘ナリシテ白河

法皇ノ御ヤナヒニテ入内后ニ立ラル元末二年五月天

皇誕生保安四年正月ニ讓リヲ受テ二月即位時ニ五歳

白忠通攝政タリ此時天皇ノ曾祖白河法皇猶存生ニ

テ院中ニテ政ヲ聽是ヲ本院ト申ス鳥羽ヲハ太上皇ト

モ新院トモ申ス同年九月修理大夫藤原野季卒ス

歳六十九倭歌ヲ以テ名アル人ナリ

天治元年二月白河ノ法皇鳥羽ノ新院同車ニテ白河ニ

御幸花ヲ御覽アリ待賢門院其外供奉ノ女房車多

クツケケリ皆奇麗ヲ盡セリ久我太政大臣雅實モ馬

ニテ供奉セラル其外殿上人狩裝束ニテ供奉ス攝政忠

通モ車ニテ供奉新院笛ヲ吹歌ヲ詠シタマフ供奉ノ公

卿女房達干詠歌ス七月雅實太政大臣ヲ辞シテ勅



十月法皇高野山へ御幸

二年五月三井寺行尊大僧正ニ任セラレテ牛車ヲユル  
サレ此僧初テ熊野三山ノ檢校トナリテ山伏修驗道ノ  
事ニ預レリ 十月石清水賀茂行幸アリ此以後平野

大原野松尾北野稻荷祇園等ノ社ヘモ行幸アリ  
大治二年二月久我前太政大臣雅實薨ス歳六十九  
十月白河法皇鳥羽上皇同道ニテ高野御幸 此年新

羅三郎源義光卒ス歳七十二兄義家ヨリヨク馬ノ藝ヲ  
傳ヘテ源氏一流ノ祖ナリ甲斐信濃常陸等ノ國々ニ  
其子孫多シ 此年源爲義ヲ檢非違使ニ任セラレテ

從五位下ニ叙セララル爲義陸奥守ニ任セラレンコトヲ望  
カレカレトモ親父頼義陸奥守ニ任セラレテ貞任宗任ガ  
乱アリ父義家陸奥守ニ任セラレテ武衡家衡カ乱アリ

今爲義ヲ任セラレバ藤原ノ基衡ト一定合戦アルベシト  
テ勅許ナシ基衡ハ清衡ガ子ナリ爲義憤テ他國ノ受  
領ニ任セス

三年三月待賢門院ノ御願トシテ圓勝寺ヲ造ラレ  
十月石清水ニテ一切經ノ供養ナリ法皇御幸アリ  
十二月攝政忠通太政大臣ニ任ス

四年三月山陽南海海賊起テ往來ノサマタケアルニヨ  
リテ院宣ヲ備前守平忠盛ニ下サレテ賊徒ヲ擧捕シム  
六月忠通攝政ヲ辞シテ關白トナル天皇元服ノユヘナリ

七月七日白河法皇崩ス年七十七此法皇在位ノ時ヨリ  
政ヲミツカラテ執行ヒ位ヲ讓テ後モ堀川鳥羽當代ニテ

院中ニテ政務ノ沙汰セラレ崩後世ヲレロシメスコト五十  
年ニ及ヘリ後世ニ院ノ御所ノ吉例ニハ白河院ヲ申スナリ  
白河崩御ノ後ハ鳥羽上皇又政務ヲキコシメスコトヨリテ禁  
中モ攝家モ院中ノ下知ニシタカハズト云コトナレト白河存生  
ノ内ハ待賢門院專ラ鳥羽上皇ニ寵セラレテ當今其外  
男女ノ御子ア<sub>マ</sub>タ誕生ス白河崩スルニヨリテ鳥羽<sub>ノ</sub>禪<sub>ル</sub>ト  
コロナク前關白忠實カ娘<sub>ヲ</sub>入内シテ高陽院ト申ス  
又參議藤原長實カ娘<sub>ヲ</sub>召テ女御トス美福門院  
是ナリ同シ時ニ女院三人アリ美福門院專ラ寵セラレ  
テ上皇<sub>ヲ</sub>政ニ急ル

五年二月關白忠通娘聖子入内シテ皇后トナル皇嘉  
門院ト号ス

天承元年七月白河院一<sub>ノ</sub>恩<sub>ヲ</sub>法勝寺ニテ法華八講ヲ  
行ル十二月右大臣家忠左大臣トナル内大臣有仁右  
大臣トナル大納言藤原宗忠内大臣トナル同月前  
白忠實鳥羽上皇ニ謁ス白河法皇ト不和ナリケルニヤ  
關白ヲ辞シテヨリ十二年ノ間<sub>ハ</sub>齎<sub>シ</sub>テ今度始<sub>メ</sub>ニ出  
ツ隨身兵仗ヲ賜ル既ニ致仕ナリトイヘトモ此以後政務  
ニアツカリ忠通ト父子ノ間不和ナリ其次男頼長<sub>ハ</sub>年  
十二歳ナルヲ甚<sub>ク</sub>愛ス  
長承元年正月忠實内覽ノ宣旨ヲ蒙ル三月上皇ノ  
御願所得長壽院ヲ建立シテ二十三年ノ堂ヲ立テ一千一  
体ノ佛ヲスヘナル平忠盛其奉行タルニヨリテ但馬國ヲ  
賜リ昇殿ヲ許サル忠盛公桓武ノ末ナレトモ國香貞盛

以來武士トナリテ。父正盛ニテ。由舎ニ住セリ。伊勢國ニ久  
ク住ニヨリテ。伊勢平氏ト号ス。レカルニ忠盛。白河鳥羽兩院  
ノ御氣色ニ叶テ。其家ヲ起スニヨリテ。人皆ソ子トム。十月  
寶莊嚴院ノ供養行幸。同月上皇高野御幸。

三年正月春日。日吉行幸。五月。右清水。加茂行幸。

保延二年三月鳥羽御堂勝光明院供養行幸御幸了  
リ。五月左大臣家忠薨ス。歲七十五。子レ公前攝政師  
實。次男ニテ。花山院ノ祖ナリ。家忠ガ弟大納言經實。笑  
炊御門ノ祖ナリ。二流共ニ清華族ナリ。十二月右大臣  
源有仁左ニ轉レ。内大臣宗忠右府ニ昇リ。大納言藤原頼  
長内大臣トナル。時二十七歲。

四年二月右大臣宗忠剃髮ス。年七十七。中御門ノ右府ト

号ス。九月上皇叡山へ御幸。中堂ニ一七日止宿。

十一月左衛門督藤原基俊剃髮ス。歲八十四。詩歌ニ  
達セリ。藤原俊成。基俊ガ弟子ナリ。コレニヨリテ。其流ノ  
歌人。基俊ヲ以テ宗師トス。

五年五月上皇寵愛ノ美福門院ノ腹ニ皇子体仁誕生。  
近衛院是ナリ。此女院既ニ一人ノ皇女ヲ産リ。若今度モ  
皇女ナルベキカト。上皇案ジワヅラヒ様々御禱アリシニ。  
男ナルユヘ甚喜ブ。關白以下皆賀シ奉ル。上皇寵愛ノ餘  
リ。當今ノ養子トナシテ。中宮皇嘉門院ヲ養母トシ。八  
月。遂ニ東宮ニ立ラル。十二月左大臣源有仁左大將  
ヲ辞ス。内大臣頼長左大將ヲ兼ヌ。大納言藤原實能右  
大將ヲ兼ラル。天皇ノ外祖公實。二人ノ子ナリ。男大納言

實行三條ト号ス。二男中納言通季ヲ西園寺ト号ス。三男ハ實能ナリ。徳大寺ト号ス。三流ノ子孫共ニ清華ナリ。閑院ノ大臣公季ノ子孫ナリ。ヨリニ。三流ヲ合テ。閑院家ト云ナリ。

六年二月。前關白忠實（忠實）轎車ニ乘テ宮中ニ出入スルコトヲ聽サル。五月。叡山ノ賊徒ニ井寺ヲ燒。六月。忠實准三宮（三宮）食邑ヲ加ヘ賜リ。隨身兵仗ヲ増加スル。十月。忠實宇治ノ別業ニ剃髮。歲六十二。十二月内。大臣頼長左大將ヲ辞ス。右大將實能ガ兄大納言實行ヲ左大將トスヘシト。叡慮思召トイヘトモ。久我相國雅實ノ子大納言雅定ヲ任セラシム。キヨヒト皇仰セラル。レカレトモ。實行ハ天皇ノ外舅ニテ。雅定ヨリ歲々ケタリ。其ウヘ弟實能既ニ右大將タルユヘカタク。實行ヲト思カレテ。雅定ヲサシム。レケレバ。アル夜。上皇俄ニ内裏ヘ御幸アリテ。直ニ仰セラレケルユヘ。雅定遂ニ左大將トナル。將并學淳和兩院ノ別當。源氏長者ノ帶スルトコロナリ。上皇ノ仰ニテ。永ク雅定ガ家ニ附属セララル。

永治元年三月。上皇鳥羽殿ニテ落飾。鳥羽法皇ト号ス。歲二十九。十二月。法皇ノハカラヒニテ。天皇何ノユヘモナク。位ヲスヘリテ。御弟東宮体仁ニ讓ル。コレヨリ法皇ト不和ナリ。年号天治二年。大治五年。天承一年。長承三年。保延六年。末治一年。在位合テ十八年。

七十六代

近衛院

鳥羽第八ノ子ナリ。諱ハ体仁。母ハ美福門院。

藤原得子中納言藤原長實カ娘ナリ。保延五年ニ誕生。即東宮ニ立。永治元年十二月即位。時三三歳。關白忠通攝政。此時鳥羽法皇ヲ一院ト申ス。崇徳上皇ヲ新院ト申ス。政務ハ皆法皇ノハカラヒニテ。新院ハ何ニモ構ハス。諸事不平ニテ。年月ヲ送ラレ。

康治二年正月法皇女院へ朝覲ノ行幸 五月法皇

東大寺ニテ受戒ス。叡山ニテ受戒

天養二年七月大ナル彗星出ルニヨリ。改元シテ久安

ト号ス。八月新院ノ御母待賢門院崩ス。同年石清

水質茂行幸

久安二年二月鳥羽殿へ行幸 十二月攝政忠通五十

ノ筭ヲ賀ス

三年二月左大臣源有仁薨ス。歳四十五。花園大臣ト号

ス。六月法皇新院叡山へ御幸 八月法皇鳥羽殿ニ

弥陀ノ像ヲ供養ス。行幸アリ

四年六月内裏焼亡 七月攝政忠通法性寺ヲ造テ

供養ス。法皇御幸アリ 八月平野大原野行幸

五年三月延勝寺供養行幸御幸アリ 七月内大臣

頼長左大臣ニ任ス。大納言實行右大臣トナル。源雅定内

大臣トナル 十月松尾北野稻荷祇園行幸 同月攝

政忠通太政大臣ニ任ス。相國辭退以後再ヒ任スル公典ヲ

初トス

六年正月天皇元服 三月忠通太政大臣ヲ辭ス

同月德大寺中納言藤原公能娘多子ヲ左大臣頼長

養テ入内皇后トナル 六月大納言藤原伊通娘皇子  
ヲ攝政忠通養テ入内中宮トナル忠通頼長兄弟ノ間  
既ニ不快ノ上ゴレヨリ弥威ヲ争フシカレドモ天皇常ニ  
中宮ニシタレシニテ皇后宮ヘハウトシ 八月右大臣實行  
太政大臣ニ任ス内大臣雅定右大臣ニ任ス大納言實能内  
大臣ニ任ス皇后多子公實能ガ孫ナリ 公能ハ實能カ子 九月  
忠通氏長者トナル 十二月忠通攝政ヲ辞シテ關白ト  
ナル 今年源義國下野國足利別業ヘ下向ス是義家が  
三男ニテ新田足利ノ兩家ノ祖ナリ

仁平元年正月左大臣頼長隨身兵杖ヲ賜リ氏長者ト  
ナリテ太政官ノコトヲ掌ル其後内覽ノ宣旨ヲ蒙ル氏  
長者ト公藤原氏ノカレラナリ内覽ト公事ノ文書奏聞  
以前ニ内覽スルユトナレ公皆關白ノスル例ナレトモ父入道  
忠實猶存生ニテ頼長ヲ愛シテ忠通ヲニクニテ如血申  
行フユヘ法皇モ菟角ノ仰トシ天皇ハ猶幼トイヘトモ此事  
ヲナゲキ思召ケルトナンカハリシ後ハ關白ハアレトモナ  
キカコトクニテ頼長威勢盛ナリ忠通ハ詩ヲ作り歌ヲ  
詠シ筆跡甚スクレタリ頼長ハコレヲ嫌テ學問常ニ博俊  
漢古今ノ事ニ通セリ藤原通憲入道信西其外ノ博士  
ヲ聚テ講談セラル其作ル記録甚多シ然レトモ我慢ニ  
テ忠通ヲ推ノケ一人レテ權ヲ執ントスル志アルニヨリ  
テ世ノ人惡左府ト名ヅク

二年三月七日鳥羽殿ニ行幸アリテ法皇五十ノ筭  
ヲ賀シタニフ翌日ニテ御逗留アリテ舞樂等ヲ御遊

アリ

三年正月二日。朝覲ノ行幸。同日刑部卿平忠盛卒ス。歳五十八。嫡男清盛其跡ヲ継グ。四月。尊上云ル。怪鳥内裏ノ上ヲ鳴度ル。兵庫頭源頼政勅ヲ奉テ是ヲ射落ス。頼長仰テ承テ御劔ヲ頼政ニ賜ル。又官女葛蒲前ヲモ賜ルト。十ニ頼政公攝津守頼光ガ子孫ニテ。弓馬ニモ倭歌ニモ達シタル武士ナリ。

久壽元年五月。久我右大臣源雅定薨歿ス。年六十。其後年ヲ歷テ薨ス。此人ノ別業ノ中院ト称ス。八月。右大將藤原實能左大將ニ轉シ。頼長カ嫡男中納言藤原兼長右大將ヲ兼シ。時十七歳。

二年七月二十三日。天皇崩ス。年十七。御子ナシ。年号

康治二年。五養元年。久安六年。仁平三年。久壽二年。合在位十四年。

七十七代

後白河院

鳥羽第四ノ子。諱ハ雅仁。母ハ待賢門院崇

徳ト同腹ナリ。

久壽二年七月。近衛院崩御アリ。此次ノ帝位タレカシカルヘキト。鳥羽法皇美福門院トハカリテ。美福ノ腹ニ生レシ皇女暲子内親王ヲ。女帝ニスヘント議セラレケルガ。稱徳以來コレナキコトナルニヨリテ。雅仁ヲ継躰ノ君ニ定メ。即位セシメ給フ時ニ歳二十九。初崇徳新院何ノユヘク。位ヲ推シロサレシカバ。此度ハ新院ノ一ノ官重仁親王ヲ。即位セシメラルヘキト。人皆思フトコロニ近

衛院ノ早世。新院ノ謀伏カト。美福門院疑ノ子ニテ。法  
皇へ申テ。重仁ヲ立ス。コレニヨリテ。新院イヨク不平ナリ。  
天皇ステニ即位ニシテ。高松殿ヲ皇居トス。ノ宮守  
仁親王ヲ東宮トス。法皇ノ姪宮暉子内親王ヲ東宮  
養母トシ。石ニ立コトナケレドモ。八條ノ女院ト号ス。其妹  
高松院ヲ東宮ノ御息所トス。此二人ノ皇女ハ皆美福門  
院ノ腹ナリ。 同年冬。法皇熊野參詣。

保元元年七月二日。鳥羽法皇崩ス。歳五十四。位ヲ讓  
テ後院中ニテ政ヲ聽コト三十四年ナリ。天皇即位ノ初ヨ  
リ忠通ハ相<sup>ハラ</sup>トス。關白タリ。賴長ハ氏長者元ノコトシトイ  
ヘドモ。内覽ヲマメラルコレニヨリテ。當今へ恨アリケルニヤ。但  
一人ニテ。天下ヲ下知セントラモハレケルニヤヨリ。崇徳新

院ヲス。メ由サハル。事アリ。新院モトヨリ世ヲ取返サ  
ノ志アリケレハ。大ニ悦テ。賴長ト密謀<sup>ミツ</sup>ナリ。法皇ノ崩御  
ニシリテ得テ。近國ノ兵ヲ呼<sup>ヨ</sup>聚ム。故ニ能御。一七日モ過キ  
ル。京中洛外騷動。新院ハ鳥羽ノ田中殿ヨリ。白河ノ  
御所へ御幸。左大臣賴長モ同ク參ラハル。内裏へ。關白  
忠通以下參<sup>サ</sup>候ス。武士ニハ下野守源義朝。安藝守平  
清盛等。内裏ヲ守<sup>ユ</sup>護ス。義朝ガ父爲義ト。清盛ハ叔父平  
右馬助忠正等ハ新院ノ名ニヨリテ。白河殿ニ參ル。爲義  
ガ子共。義朝カ外ハ皆新院ノ御方ニアリ。其中ニ鎮西ハ  
郎爲朝ハ強弓<sup>ツヨ</sup>精兵無<sup>ブ</sup>双<sup>フ</sup>ノ勇士ナリ。同キ十一日ノ夜。  
少納言入道信西<sup>シ</sup>勅ヲ奉テ。義朝清盛等ヲレテ。新院  
御所ヲ攻シム。爲朝防<sup>フ</sup>戰フニヨリテ。官軍多ク討<sup>ツ</sup>ル。義朝



火ヲ放ツテ。白河殿ヲ燒ハラフ。新院ノ軍敗テ分散ス。左大臣賴長ハ流矢ニアタリテ死ス。歳三十六。新院ハ出家シタニヒレテ。讚岐國ヘ流シタテミツラル。時ニ歳三十八。重仁親王モ出家セラル。賴長ノ子兼長。師長。教長。僧範。長皆流罪。爲義忠正ハ降参シケルヲ。清盛奏聞シ。忠正并其子共ヲ誅ス。ユレニヨリテ。義朝ニ勅シテ。爲義ヲ殺シシム。爲義ガ子共八人。皆捕之レテ殺サル。爲朝一人。無類ノ勇士ナルニヨリテ。死罪ヲ宥テ。伊豆ノ大嶋ヘ流ス。其餘ノ黨類。或ハ誅セラレ。或ハ流サル。富家ノ入道相國。忠實。モ。賴長ハ鼻負シ。新院方ナレ。流罪タルヘシト。沙汰アリレテ。忠通父ヲ流シテ。公コレ關白タルヘカラスト。信西ヲ以テ奏シケレバ。赦免セララル。忠實聞テ。父子ノ間初テ和睦。此合戰。君臣上下共

ニ親類骨肉相爭フ。前代木間ノコトナリ。王法コレヨリ次第ニ衰微セリ。嵯峨天皇ノ時。藤原仲成誅セラレテヨリ。後。死罪行ル。トハナカリシニ。今度多ク死罪ニ處セララル。信西カ申シラコナフ取ナリ。信西ハ倭漢ノオアリテ。博學ノ者ナリ。久ク沈淪シニ。アリシヲ。當今登庸シテ。御前ニ近習シ。政務ヲ執行ス。今度ノ軍功ニヨリテ。義朝ハ左馬頭ニ任シ。清盛ハ播磨守ニナル。藤原氏ノ長者ハ元ノコトク關白忠通ニ授ケラル。九月内大臣實能。左大臣ニ任ス。大納言藤原宗輔。右大臣ニ任ス。大納言藤原伊通。内大臣ニ任ス。世既ニレツルニヨリテ。天皇自ラ政ヲ聽タニフ。後三條ノ例ヲ追テ。記録所ヲ造テ。訴訟ヲ決斷セララル。

二年八月藤原實行太政大臣ヲ辞退ス 同比徳大  
寺左大臣實能薨ス右大臣宗輔太政大臣ニ任シ内大  
臣伊通左大臣ニ任シ關白忠通ノ子基實右大臣ニ任ス  
時十 大納言藤原公教内大臣ニ任ス公教ハ實行カ子  
五歲 ナリ 十月大内裏造管白河院ヨリ以後里内裏ハ  
カリナリシラ今度再興セラル殿門ノ額公忠通コレヲ書  
諸殿諸社局々ヲ分テ后女御等ヲソナヘ置ル洛中ノ道  
路モ拂キヨメテ古ノサカニナリレ時ノゴトトカヤ

三年正月美福門院へ朝觀ノ行幸繼母ナレトモ實母ニ  
准セラレ 同月ノ二十二日内宴ヲ行シ舞樂アリ忠通  
以下詩ヲ獻スユレモ百年アコリタヘタルコトナリ其外中  
絶タル政信西奏シテ再興スルコト多シ 八月天皇位ヲ東

宮守仁ニ讓テ太上天皇ノ尊号ヲ蒙ル 年号保元在

三年

七十八代

二條院

後白河第一ノ子諱八守仁母ハ藤原懿子大炊

御門贈太政大臣經實ノ娘ナリ後白河即位ノ時東宮

ニ立保元三年八月讓ヲ受テ即位忠通關白ヲ辞ス其

子右大臣基實ヲ關白トス時二十六歳ナリ天下ノ政務ハ

皆後白河上皇沙汰シタニシ信西イヨク近習シテ權威

ヲ振テ

平治元年正月三日上皇へ朝觀ノ行幸アリ 同月二

十一日内宴行ル此以後ハ又絶テ行レズ 此比中納言

右衛門督藤原信賴ト云者アリ才能ナケレトモ時ニ逢

二十。官位昇進セリ。今年二十七歳。朝恩ニホコルマニ。大  
將ニ任セラレシコトヲ望ム。後白河上皇カレカレ。朕望如何  
レキト。信西ニ仰セ談セラル。信西。大將ハ昔ヨリ其人  
ヲエラハル。大臣ニ任スレトモ。大將ニハナリカタク例多シ  
信頼ナトカ望ヘキコトニアリス。ト諫申ス。信頼聞テ大  
ニ怒リ。常ニ武藝ヲ習ヒ。信西ヲ滅サントハカル。信西公平  
清盛トシメシ。故ニ信頼ハ源義朝ヲカタラフ。義朝モ  
勢ニ乗テ。清盛ヲ討ントラモヒ同心ス。十二月。清盛  
熊野參詣ス。コレヲ能隙トヲモヒ。信頼義朝。兵ヲヒキ  
イテ。上皇ノ御所ニ條殿ヲ焼拂。多ク人ヲ殺ス。信西  
ヲ尋レトモニヘス。信西豫ステニ御所ヲ逃出テ。奈良  
ヘ赴キ。生ナカラ土ヘ掘埋ル。イニタ死サル内ニ。追手ノ

兵來テ。土ヲ掘ラユレ。信西ガ頸ヲ斬テ歸洛。其子共ハ  
皆流罪セラル。上皇ス。内裏ノカタハラニ押籠。主上ヲ  
ハ黒戸ノ御所ニ置。ヒラセテ。信頼ハ自ラ大臣。大將  
ニナリテ。禁中ニ住シ。朝餉ノ御座ニ居テ。恣ニ威ヲ振ヒ。  
義朝等ニ恩賞ヲ行フ。清盛コレヲ聞テ。急上洛シ。六波  
羅ノ館ニ歸ル。同月二十六日ノ夜。大納言藤原經宗  
院ノ別當藤原惟方ガハカラヒニテ。主上ハ潛ニ六波羅  
ヘ行幸。上皇ハ容ニ仁和寺ヘ御幸。百官皆六波羅ヘ參  
ル。二十七日。清盛ガ嫡男重盛大將ニテ。信頼義朝  
ヲ伐シ。信頼ハ臆病ニテ。戰フコトアタハス。義朝并ニ其子  
悪源太義平。數度合戰ストイヘドモ。源氏遂ニ討負テ。  
東國ヘ落行。信頼ハ捕ラレテ誅セラル。其親類同類或ハ

死罪。或ハ流罪。清盛并其子弟皆恩賞ヲ行ル。明年  
正月三日。義朝尾張ノ國野間ニテ其家人長由忠宗ニ  
殺サル。歳三十八。忠宗カ婿鎌田政清公義朝カ第一ノ  
郎等ナリ。義朝ト同ク殺サル。同十日。改元アリテ。未曆  
ト号ス。義朝カ嫡男義平公無双ノ勇士ナリレガ。ヒソカニ  
京ニ入テ。清盛ヲ子ラヒケレドモ叶公遂ニ生捕レテ誅セ  
ラル。歳二十。次男朝長公都ノ合戦ニ負テ落時瀨ヲ蒙リ。  
美濃ノ青墓ニテ死ス。三男頼朝公尾張ノ國ニテ落行レ  
テ平家ノ士宗清生捕テ上洛ス。既ニ死罪タルヘキヲ。清  
盛カ継母池ノ尼ガ申請ニヨリテ。伊豆ノ國ヘ流サル。頼朝  
時二十四歳。義朝カ妻常盤公カクレキ美人ナルニヨリ  
テ。清盛コレヲ召テ妾トス。故ニ其腹ノ男子三人ハ流罪ニ

モ及バズ。其内牛若ト云ハ總ニ二歳ナリ。後ニ源九郎義  
經ト云ハ是ナリ。七月藤原宗輔太政大臣ヲ辞ス。  
同月内大臣藤原公教薨ス。前太政大臣藤原實行モ薨  
ス。歳八十四。八月左大臣伊通。太政大臣ニ任ス。關白右  
大臣基實。左大臣ニ任レ。大納言公能右大臣ニ任レ。基實  
ノ弟大納言基房内大臣ニ任ス。平清盛参議ニ任レ。正三  
位ニ叙ス。義朝既ニ誅セラレ。源氏衰ヘケレバ。清盛遂ニ  
天下ノ權ヲ執レリ。此年藤原多子ヲ召テ后ニ立ラル。  
コレハ近衛院ノ后ナリ。近衛崩レテ後ハ幽ナル体ニテラハ  
セレラ。其美人タルコトヲ。主上キコシ召テ。其父右大臣  
公能ニ勅レテユレラメス。此事然ルヘカラズト。上皇モ思  
召群臣モ諫申セドモ。御承引ナレ后モ様々辞退ストイ

ヘドモ叶ズ。遂ニ入内コシテ二代ノ后ト申ス。主上時二十  
八。后八時三十三。コレヨリ主上ト上皇ト睦シカラス。  
應保元年二月春日行幸。其外洛邊ノ諸社ヘモ行幸アリ。  
八月德大寺右大臣公能薨ス。歳四十七。基房右大  
臣ト十九。大納言藤原宗能内大臣ト十九。平清盛中納言  
ニ任ス。十一月美福門院崩ス。

二年正月上皇ヘ朝觀ノ行幸。同月前太政大臣宗輔  
薨ス。平清盛檢非違使ノ別當ト十九。六月富家入道相  
國忠實薨ス。歳八十四。知足院關白ト云ハ是ナリ。  
長寛元年正月平重盛從三位ニ叙ス。

二年二月上皇ノ御願所蓮華王院造畢。同月東大寺  
興福寺萬僧會朝家祈禱ノ爲ナリ。同月前攝政忠

通薨ス。歳六十八。法性寺殿ト号ス。鳥羽ノ代ヨリ當代  
テ攝政關白タリ。再相國ニ任レ。四十年ハカリ朝政ヲ執  
レリ。八月崇徳院讚州ニテ崩ス。歳四十六。白峯ニ葬  
ル。十月關白基實左大臣ヲ辞シ。宗能内大臣ヲ辞ス。  
基房左大臣ニ轉シ。藤原經宗右大臣ト十九。基房弟大納  
言兼實内大臣ニ任ス。基房ト兼實ト。左右大將ヲ兼基  
實ハ近衛殿ノ祖ナリ。基房ハ松殿ト号ス。兼實ハ月輪ト号  
ス。九條殿トモ号ス。此三公皆忠通ノ子ナリ。  
永萬元年二月大宮太政大臣伊通薨ス。歳七十三。  
三月伊豆太嶋ノ流人源爲朝鬼嶋ヘ渡テ。其地ヲ押領  
ス。五月平重盛參議ニ任ス。六月天皇不例位ヲ  
御子順仁ニ讓リ。太上天皇ト号ス。七月二十八日ニ

崩ス。歲二十三。年号平治一年。永曆一年。應保二年。  
長寛二年。末萬一年。在位合テ七年。

七十九六

六條院 二條院ノ子諱八順仁。母大藏大輔紀兼盛  
カ娘ナリ。

永萬元年六月即位。時ニ二歲。關白基實攝政ス。御祖  
父後白河上皇院中ニテ政務ヲ沙汰セラレ。同八月。  
平清盛大納言ニ任ス。

仁安元年七月卒。重盛中納言ニ任ス。同月攝政基實  
薨ス。歲二十四。太政大臣ヲ贈ル。其弟左大臣基房  
カハリテ攝政。十月上皇ノハカラヒニテ。憲仁親王ヲ東  
宮ニ立ラル。憲仁公上皇ノ子。主上ノ叔父ナリ。十上ハ三歲

東宮ハ六歲ナリ

十一月基房左大臣ヲ辞ス。右大臣經宗ヲ左ニ轉シ。内  
大臣兼實ヲ右府トシ。平清盛内大臣ニ任ス。

二年二月十一日。清盛内大臣ヨリ直ニ太政大臣ニ昇  
進ス。從一位ニ叙セラレ。隨身兵仗ヲ賜リ。轎車ニノリテ。  
宮中ニ出入スルコトユルサル。時ニ歲五十。大納言藤  
原忠雅内大臣ニ任ス。平重盛權大納言ニ任シ。帶劔  
ユルサル。五月清盛大政大臣ヲ辞ス。八月清盛ニ官  
符ヲ賜リ。播磨肥前肥後ノ郡郷ヲ賜テ。功由トス。其三  
男宗盛參議ニ任シ。二位ニ叙ス。平家次第ニ繁昌シテ。肩  
ヲナラブルモノナシ。

三年二月上皇ノハカラヒニテ主上位ヲスヘリテ。太上天

皇ノ尊号ヲ蒙リ新院ト号ス時纔三五歳イニダ元服ニ  
ヲヨバズシテ。如此ノ先例ナシ 年号仁安在位三年

八十代

高倉院

後白河第三ノ子諱ハ憲仁母ハ建春門院平時子。贈左大臣時信カ娘ナリ。後白河上皇ノ愛子ナルニヨリ  
テ。六條院ノ東宮ニタチ。仁安三年三月即位時ニ八歳基  
房攝政ス。政務ハ皆後白河上皇ノサハキナレ。院中伺候ノ  
輩威ヲ振ヘリ。清盛カ妻平時子ハ建春門院ノ姉ナリ。故ニ  
平家弥勢ヲ得タリ。建春門院ノ兄大納言平時忠禁裏  
ヘモ院ヘモ平家ヘモ親ニアルニヨリテ。權柄ヲ執ル時ノ人  
是ヲ平關白ト云。八月花山院内大臣藤原忠雅太政  
大臣ニ任ス。久我大納言源雅通内大臣ニ任ス。十一月

十一日。清盛疾ニヨリテ。剃髮名ヲ淨海ト改ム。時ニ歳十  
十一。入道相國ト号ス。或ハ六波羅ニ住ル。或ハ西八條ニ  
住ル。或ハ攝州福原別業ニテリ。其妻平時子ヲ八條二位  
殿ト号ス。嫡男重盛ヲハ小松殿ト号ス。弟頼盛ヲハ池  
殿ト号ス。其餘ノ子弟皆官位ニ榮達ス。  
嘉應元年三月。後白河上皇高野山ヘ御幸。六月上皇  
落飾。法皇ト号ス。十二月。叡山ノ衆徒誅ニヨリテ。中  
納言藤原成親備後國ヘ配流。成親公法皇ノ近臣ナルニ  
ヨリテ。程ナク。召復サル  
今年。石清水賀茂行幸

二年春。伊豆國ノ狩野介茂光上洛シ流八源爲朝嶋ト  
ヲ擲。茂光カ所領ヲモ妨ル由奏シケレハ追討ス。キ由

院宜ヲ奉テ歸國ス 四月關東ノ兵ヲ催ラ爲朝ガ大  
嶋ノ宅ヲ攻爲朝矢ヲ放テ船ヲ射破リ人々多ク殺シ  
テ後自害ス歲三十三 六月忠雅太政大臣ヲ辭ス  
十月重盛ノ次男資盛鷹野ノ歸路ニ攝政基房ノ参  
内スルニ行逢テ下馬ニ及ハス无禮ナリ殿下ノ供奉ノ者  
怒テ驅寄テ資盛ヲ馬ヨリ引テロス清盛大ニ腹立テ武  
士共ニ命ジテ後日基房ノ参内スル路次ヲ遮リ其車ヲ  
打破リ隨身等ガ髻ヲ切ル是平家悪逆ノ始ナリ重盛  
驚キ畏テ資盛ヲ伊勢ノ國へ遣シ暫ク暫居セシム  
十二月基房太政大臣ニ任ヌ平宗盛中納言ニ任ヌ  
承安元年正月三日主上元服御歳十一同十三日  
法皇へ朝覲ノ行幸清盛ガ娘徳子十五歳入内女御ト

十九

二年二月女御平徳子中宮トナル 三月日吉行幸  
七月法皇新造三條鳥丸御所へ移ル院別當中納言成  
親三位ヨリ從二位ニ叙ス 十月稻荷祇園行幸  
十二月基房攝政太政大臣ヲ辭シテ關白トナル  
三年四月石清水資茂行幸 十月建春門院ノ御願  
所寂勝光院供養行幸宗盛行事ノ賞ニヨリテ從二位ニ  
叙ス  
四年正月法皇并建春門院へ朝覲ノ行幸 三月故左  
馬頭源義朝カ末子牛若潛ニ出京奥州へ赴キ藤原秀  
衡カ許ニアリ牛若自ラ元服シ九郎義經ト称ス時ニ  
十六歳 七月大納言平重盛右大將ヲ兼此時ノ左大



將ハ大納言藤原師長ナリ頼長ガ子ナリ

安元元年二月久我内大臣源雅通薨ス年五十八  
十一月藤原師長内大臣ニ任ス 今年重盛金三千兩  
ヲ大宋國へ渡シ育王山へ施入ス

二年三月法皇ノ御所へ行幸アリテ五十ノ筭ヲ賀シ  
タマフ 七月六條院崩ス歳十三 同月建春門院

崩ス 此比加賀國司藤原師高叡山衆徒ト申分アリ  
師高カ父ヲ西光法師ト云元信西カ家人ナル信西死シテ  
法皇ノ北面ニ近侍シテスコフル威ヲ振ヒ師高加賀守ニ任  
ゼラル其弟師經目代トシテ在國ニ叡山末寺鶴河ノ僧  
ト相論ノ事アリテ其坊舎ヲ燒テ互ニ合戦ニ及ブコレニ  
ヨリテ彼僧等白山ノ神輿ヲ叡山へ振上テ訴フ叡山

ヨリ公家へ申シ師高ヲ流罪シ師經ヲ禁獄セント申ス  
トイヘトモ西光法皇ノ御氣色ニ叶フユヘ山門ノ訴訟コ  
トユカス

治承元年正月内大臣師長左大將ヲ辞ス大納言重  
盛左大將ニウツリ中納言平宗盛右大將ニ任ス此比  
徳大寺大納言藤原實定花山院中納言藤原兼雅共  
ニ清華タルニヨリテ大將ヲ望メリ又院ノ別當新大納  
言藤原成親モ已カ權威ヲ頼ニレキリニ大將ヲ望ニケ  
トモ叶スレテ清盛ハカラヒニテ重盛宗盛兄弟左右ニ  
相並ヘリ成親ガ妹ハ重盛ノ妻ナリ重盛ノ嫡男惟盛  
成親ガ婿ナリ重縁ノヨレニアリトイヘトモ平家ノ奢ヲ  
惡ニテ常ニ法皇へ申シテ西光等ノ黨類ト平家ヲ亡

ハシコトヲ謀ルコトニイタリテ。宗盛ニ超ラレ、コトヲ怒テ。  
東山鹿谷ト云所ニ會合シ密談ス。法皇モ御幸ナリテ。其  
事ヲ聞カケルトナシ。三月。師長内大臣ヨリ直ニ太政大  
臣ニ任ス。重盛内大臣ニ任ス。左大將元ノコトニ攝家清華  
ノ外。大臣大將兼帶ス。人皆驚ク。左大臣經宗ヲ尊者ト  
シテ大饗ヲ行ハ。此時重盛宗盛カ外ニ清盛カ弟頼盛ハ  
中納言タリ。教盛ハ參議タリ。經盛并宗盛カ弟知盛從三  
位タリ。四月。叡山ノ衆徒。師高師經カ罪ヲ度ク。誅ケレト  
モ。法皇裁許ナキニヨリテ。同月十三日。衆徒等。日吉神  
輿ヲ振上テ入洛シ。内裏ヘ入シ。ス。重盛等ノ平氏并源  
頼政ニ命ジテ。御門ヲ警固ス。重盛ノ堅タル門ニテ。神輿  
ニモ矢下タリ。衆徒モ傷テ。神輿ヲ捨テ歸山ス。其後平

大納言時忠勅使トシテ登山。衆徒ヲ宥ス。師高流罪  
ラシ。師經禁獄セラル。同月二十八日。洛中大火事。屋  
烈シテ。大内裏采女炎上。五月。法皇山門ノ嗽訴ヲ憤テ。  
座主明雲ヲ伊豆國ヘ流サレ。西光カ讒言ナリト。沙汰ア  
ルニヨリテ。衆徒起テ。路次ニテ。明雲ヲ奪取テ登山ス。  
法皇彌怒ニ。成親等ニ命ジテ。山門ヲ攻メテ。其折節多  
田藏人行綱ト云者。成親ニ頼シ。平家追討ノ大將タルヘシ  
ト約シケルガ。忽ニ心ガハリシテ。同月二十九日。大波羅ニ  
行テ。成親ガ密謀ヲ告。清盛大ニ怒テ。六月朔日。成親  
西光并同類悉捕フ。西光ハ忽ニ誅セラレ。其子師高師  
經モ斬罪セラレ。成親モ既ニ誅セラレ。ベキヲ重盛教訓  
シテ。暫クタスケラレ。備前ノ兒嶋ヘ流サレ。清盛怒ノ

餘法皇ノ御所法住寺ヲ攻ントシケルヲ重盛様々諫テ  
ヤニス。成親ガ子成經平康賴俊覺トシ都鬼界嶋トシへ流サ  
ル。其餘ノ同類皆流罪。其後成親ハ配所ニテ遂ニ誅セラ  
ル。同月重盛左大將ヲ辞ス。十二月德大寺大納言  
實定左大將ヲ兼任ス。安藝嚴嶋トシヲ平家信仲スルニヨ  
リ。實定嚴嶋へ参リ。大將ニ任セラレシコトヲ祈リケレバ  
清盛聞テ感レテ。其望ヲ達シケルトゾ。

二年四月春日行幸平宗盛大納言ニ任ゼラル

十一月十二日中宮平德子皇子誕生清盛大ニ喜フ。

法皇モ六波羅へ御幸。關白以下ユキテ賀ス。十二月

皇子東宮ニ立ラル重盛東宮ノ傳カシキタリ。賴盛大夫タリ。

或說ニハ左大臣經宗ヲ東宮ノ傳トシ。平宗盛ヲ大夫

トスト云リ。同月源賴政從三位ニ叙ス。年來望ムレ

モ事ユカザリレガ清盛其沈淪トシヲ憐トシテ執奏シケルトゾ。

藤原成經平康賴赦ニ逢テ歸洛。俊覺ハ罪重キニヨ

リテユルサレズ嶋ニテ死ス。

三年二月宗盛右大將ヲ辞ス。二月重盛内大臣ヲ

辞ス。同月高雄ノ僧文覺罪アリテ。伊豆ノ國へ流

サル。五月京中飈吹テ。人家多ク顛倒ス。

此夏重盛熊野參詣歸京。七月疾病。八月朔日薨

ス。歲四十三。法皇ヲハシメ。上下皆慟トシ。十一月大地

動。同月清盛福原ヨリ上洛シ。法皇へ恨トシアルトシ。赴条

々ヲ迷。松殿關白基房ヲ備前へ流ス。妙音院ノ太政

大臣師長ヲ尾張へ流ス。其外按察大納言源資方以

下。月卿雲客四十三人ノ官爵ヲケツリテ蟄居セシム。  
故關白基實ノ子基通ハ清盛カ婿ナリ。此時イマニ  
位中將タリシヲ直ニ内大臣ニ任シ。關白トシテ左大臣經宗  
右大臣兼實カ上ニ居シ。基通時ニ二十歳ナリ。法皇  
ノ御取法住寺殿ヲモトリカコニ。宗盛ニ命ジテ。法皇  
ヲ鳥羽ノ離宮ヘ押籠奉リ。宗盛ヲ京ニ留テ。清盛ハ  
福原ヘ飯ル。清盛ガ悪行ハトクキサストイヘトモ。重盛存  
生ノ中ハ制セラレテ堪忍シケルカ今ハ諫ル者ナキヨ  
リテ如此。

四年二月。天皇位ラスヘリテ。東宮ニ讓ル。閑院殿遷  
居ス。六上天皇ノ尊号ヲ奉ル。年号嘉應二年。承  
安四年。安元二年。治承四年。在位合テ十二年。

八十一代

安徳天皇

高倉院ノ子諱ハ言仁。母ハ建禮門院平徳  
子。太政入道清盛カ娘ナリ。治承二年十一月誕生。同四  
年二月。高倉院ノ讓リヲウケ。二歳ニテ即位。清盛夫婦  
准三宮ノ宣旨ヲ蒙ル。關白基通攝政。後白河法皇ハ鳥  
羽殿ニ蟄居シ。高倉上皇ハ新院ト申セトモ。政務ヲイ  
ロヒタマハス。攝政モ名ハカリニテ。天下ノコト。大小トナ  
ク。皆清盛カマ、ナリ。三月。新院安藝ノ嚴嶋ヘ御幸  
平家ノ信スル神ナレハ。清盛悦ニ。其心モヤハラキナハ。  
法皇ヲ鳥羽ヨリ出シ申スコトモアルヘキカトノ獻  
慮ナリ。四月。源賴政密ニ以仁親王ヲス、メテ平家  
ヲ亡サシコトヲハカル。以仁親王ハ法皇ノ第二ノ子。新

院ノ別腹ノ兄ナリ。三條高倉ニ住スルユヘニ。高倉ノ宮ト申ス。頼政ガ子伊豆守仲細公重盛當ニ懇ニアヒシラワレケルエ。示盛ハサモナクニ。不快コト、モ多キユヘ。父子共ニ此宮ヲス、メテ諸國ノ源氏共ニ宮ノ令旨ヲ賜リ。仲細カ奉ニテ觸遣ス。故爲義カ末子十郎行家ヲ使者トス。行家先伊豆ヘ下リ。流入前右兵衛佐源頼朝ニ觸テ。其ヨリ次第ニ行廻ル。五月頼政ガ密謀アラハレテ。高倉ノ宮ヲ誘引シ三井寺ヘ入。彼寺僧ヲカタラヒ。又南都ノ衆徒ヲ牒シ合テ。三井寺ヨリ奈良ニ赴ケル路次宇治ノ平等院ニテ。宮ヲ暫ク休メ奉ケル處ヘ。平家知盛等ヲ大將トシテ。討手向ヒケレ。頼政橋ヲ引テ防戦ス。足利忠綱先陣ニテ河ヲ渡リ平家ノ入勢ツキケレバ。

仲細 并其弟兼綱等ハ討死シ。頼政ハ自害ス。時歲七十五

倉宮ノ奈良ヘ落フレケルカ光明山ト云取ニテ。流失ニアタリテ薨ス。時ニ二十歳清盛又知盛等ヲ遣シテ。三井寺ヲ攻テ焼セス。六月清盛カハカラヒニテ。都ヲ攝州福原ニ遷ス。主上行幸法皇上皇モ御幸ナル。百官皆心ナラス。福原ヘ赴ク。桓武天皇。平安城ヲ定メラシテヨリコノカタ。遷都其例ナレ。法皇ヲハ高倉ノ宮ノコトニヨリテ。又福原ノ御所ニ押籠奉ル。頼政カコトニヨリテ。諸國ノ源氏ヲ悉ク殺スヘシト。清盛申サル。沙汰アルニヨリテ。源頼朝伊豆國ニテ此事ヲ傳聞藤九郎盛長ヲ使者トシテ。關東ノ家人等ヲ相カタラヒ。義兵ヲアケント謀ル。千葉介常胤。三浦介義明等以下。同意ノモテ

多シ。コレヨリサキ。高雄ノ僧文覺當國ニ流サレ時々頼  
朝ノモトへ來リ平家ヲ討ヘシトス。メケルカ是ヲ聞テ  
密ニ福原へ赴キ藤原光能ヲタノミテ。法皇ノ院宣ヲ申  
講ニ。伊豆へ歸テ。頼朝ニ授ク。八月頼朝其舅北條時  
政并佐々木兄弟等ヲ遣シ伊豆ノ目代山木判官平  
兼隆ヲ討殺シ。其ヨリ頼朝自ニ三百餘騎ニテ。相模  
國ニ出張シ。石橋山ニ陣ス。當國ノ士大庭景親ハ本ハ義  
朝カ郎從ナリシ。近年平氏ノ重恩ヲ蒙ルニヨリテ。三千  
餘騎ヲ率テ攻來ル。頼朝敗軍シ。佐奈田與一義忠討  
死ス。頼朝退テ枚山ニ入。景親追來。佐々木高綱等コレ  
ヲ拒ク。其間ニ頼朝逃走ル。一所ニ從モ。時政土肥實平  
岡崎義實足立盛長土屋宗遠新開忠氏土肥遠平等

ナリ。然レトモ。實平カハカヲヒニテ。時政等ヲシテ。ワザ  
散セシメ。頼朝ハ伏木ニカクレ居ル。實平相從ス。景親カハ  
梶原平三景時尋來テ。頼朝ノカクルトコロヲ見ツケタ  
リト云ドモ。ウサト見サルニ。子ニテ。此山ニハ人跡ナシト云テ。  
景親ヲトモナヒ。他所へ赴ク。頼朝カハラキ命タスカリテ。箱  
根山ニ入。時政等モ出會ス。時政カ長子宗時ハ路次ニテ討  
レヌ。三浦介義明ハ其子義澄嫡孫和田義盛等三百騎  
ヲシテ。石橋へ遣シケルカ。頼朝スニ。敗レ行方ニレサルコ  
三浦へ歸ル路小坪ニテ。白山重忠ニ逢テ合戦シ。勝利ヲ  
得タリ。重忠カ井子テ大勢ヲモヨホシ。三浦ノ緋笠城ヲ  
攻ケレバ。義明ハ八十九歳ニテ討死シ。義澄義盛等ノ一  
族共ヲシテ。頼朝ヲ尋來シ。頼朝ハ管根ヨリ土肥へ赴

キ。舟ニ乗テ安房へ渡ル海上ニテ義澄義盛等漕逢  
タリ。コレニヨリテ。安房ノ國ノ勢ヲアツメ。九月下総へ赴  
ク。千葉介常胤一族引與シ相從ス。北條時政ヲ甲斐  
國へ遣ヒ。其國ノ源氏等ヲカタラハシム。隅田河ノ邊ニ上  
総介廣常一萬騎ヲ率テ頼朝ニ謁ス。頼朝其遲參ヲ  
イカリテ。後陣ニ依セシム。廣常モト頼朝ヲ試シハカ心  
アリケルカ。其威重クシテ。人君ノ器量アルヲ感ジテ心服  
ス。十月武藏へ到リケレハ國中ノ士歸服ス。畠山重  
忠モ降参ス。其ヨリ頼朝ハ常胤カス、メニヨリテ。相模  
國ニ入テ。鎌倉ニ住ス。此所ハ先祖源頼義カ舊跡ナリ。関  
東八洲コトクク靡テ。鎌倉殿ト仰キ尊フ。此比木曾  
冠者源義仲信濃ヨリ起テ。上野ヲ歷テ越後へ赴テ北

國ヲ從ヘントス。是ハ爲義カ孫義賢カ子ナリ。二歳ニテ父  
ニ別レ。久ク信濃ニ住セリ。頼朝トハ從弟ナリ。新田大炊  
助義重ハ上野ノ國寺尾ノ城ニアリ。義家ノ嫡孫ニテ。義  
國カ子ナルユヘ。自立ノコ、ロサレアリテ。暫ク頼朝ニ從  
ハザリシガ。後ニハ歸服セリ。頼朝鎌倉ニテ頼義カ勸  
講シケル鶴岡ノ八幡宮ヲ造管シ。再興ス。八幡ハ源  
家ノ氏神ナルニヨリテ。殊ニ信仰セリ。頼朝十四歳ニテ  
配流セラレ。二十年餘ヲ歷テ。家運ヲ興セリ。今年三十  
四歳ナリ。清盛此ヲ聞テ大ニ怒リ。嫡孫少將維盛ヲ大  
將トシ。舍弟薩摩守忠度ヲ副將トシテ。上総守忠清齋  
藤實盛等三萬騎ニテ頼朝ヲ攻レム。駿河國富士河ニテ  
對陣ス。此所へ時政甲斐源氏等ヲトモナイ出會。源氏イ

ヨク大勢ニナリケレバ惟盛忠度等頼朝ノ兵威ニ畏レテ  
戰ニ及ハス逃テ福原へ歸ル頼朝此勢ヒニテ駿河遠江ヲ  
平ケテ鎌倉へ歸ル時黃瀬河ノ宿ニテ九郎義經奥州  
ヨリ來テ頼朝ニ參會ス大庭景親モ降人トナリテ出ケ  
ルヲ斬罪セラル伊東祐親ハ生取レテ三浦介義澄ニアツ  
ケラル此祐親ハ頼朝流入タリシ時宿怨マリ然レトモ義  
澄カ舅ナルニヨリテ年ヲ歷テ赦免マリケレバ祐親自害  
セリ其外石橋山ノ合戰ニ敵トナリレ者大方赦免セリ  
十一月頼朝常陸國へ赴キ佐竹秀義ヲ殺ス鎌倉へ返  
テ和田義盛ヲ侍所別當トス 十二月清盛福原ヨ  
リ都ヲ平安城へ復ス主上上皇法皇皆舊都へ還幸  
同月清盛カ五男重衝大將ニテ南都へ向ヒ東大寺興  
福寺ヲ焼拂フ頼政ニ通スル故ナリ

養和元年正月高倉上皇崩ス歲二十一 二月清盛  
奏聞シテ越後國ノ城助長ト云者ヲ越後守ニ任ジテ  
木曾義仲ヲ討シム此北東國北國ハ申スニ及ハス西海  
南海ニモ軍起テ筑紫ニハ緒方惟義四國ニハ河野  
通清其子通信源氏ニ屬シ平家方ノ者ト合戰ス頼  
朝ノ叔父行家ハ已ニ尾張國ニテ攻上ル平家ヨリ知  
盛惟盛等東國北國へ發向ストイヘトモ或ハ病ト稱シ  
テ歸リ或ハ路次ニ逗留シテ進マズ 閏二月四日清  
盛薨ス歲六十四其夜西八條館炎上ス宗盛ニテ清  
盛ガ跡ヲ繼テ一門ノ棟梁トナリ政事ヲ行フ法皇ヲ  
本ノ御所法住寺へ還奉ル 同月頼朝叔父義廣常



陸下野ノ兵ヲアツメ。頼朝ニ背ク小山朝政コレヲ討破  
ル。三月重衡ヲ大將ニテ。東行セシム。尾張國墨谷川ニ  
テ。行家ト合戦シ。平家利ヲ得タリ。源義圓討死ス。此ハ  
義經同腹ノ兄ナリ。五月。頼朝鶴岳ノ若宮ヲ造營ス。  
六月。城助長兵ヲ起シ。木曾義仲ヲ討ントテ。出陣ノ時  
助長械ニ死ス。七月。宗盛ガ家臣貞能ヲ筑紫ヘ遣ヒテ。  
乱ヲレツメシム。八月。平家ノハカラヒニテ。陸奥守藤原  
秀衡ニ勅シテ。頼朝ヲ討レム。秀衡同心セス。

壽永元年二月。頼朝神寶ヲ伊勢太神宮ニ奉納ス。  
六月。攝政基通内大臣ヲ辞ス。八月。頼朝ノ嫡子頼  
家生ル。母ハ平政子。北條時政ガ娘ナリ。時政ハ桓武ノ  
後胤平將軍貞盛ガ末ナリ。貞盛ガ嫡子惟衡ハ清盛

カ祖ナリ。二男。惟將公時政ガ先祖ナリ。其母源頼義公平直  
方ガ娘ヲ娶テ。義家等ヲ生ル。直方公時政ガ高祖ナ  
レ。其由緒ナキニアラス。九月。城助長カ弟長茂越  
後守ニ任セラレ。兵ヲ催シ。木曾義仲ヲ討ツ。義仲合  
戦シテ大ニ勝ツ。長茂逃走ル。此ヨリ義仲ガ威。北陸  
道ニ振ヘリ。其即從今井兼平。樋口兼光。楯親忠。根  
井行近ヲ。四天王ト号ス。兼平殊ニスグレタリ。十月。  
宗盛内大臣ニ任ス。兵仗ヲ給ル。此比頼盛大納言タリ。  
教盛知盛中納言タリ。經盛參議タリ。教盛經盛モ清  
盛カ弟ナリ。宗盛カ嫡子。清宗正三位侍從タリ。重衡惟  
盛共ニ從三位中將タリ。  
二年正月。法住寺ハ朝野ノ行幸。頼朝ノ弟希義ト云モ

ノ土佐國ニ流人ニテ居ケルヲ宗盛使者ヲ遣シテ殺  
ス。二月宗盛從一位ニ叙ス。内大臣ヲ再ス。德大寺實  
定内大臣トナル。三月賴朝ト義仲ト不和ニテ巳ニ合  
戰セントス。義仲其嫡子清水冠者義高ヲ入質トシテ  
出シ和ヲ請ケレ。賴朝此ヲ獲テ鎌倉ヘ歸リ義高ヲ  
婚トス。四月平惟盛通盛大將ニテ忠度經正清房知  
教副將ニテ十萬騎ヲ率ヒ北國ヘ發向シ義仲ヲ討ツ  
五月北國ニテ平家義仲ト合戰越前火越城ノ戰  
ニ平家勝ト云トモ越中ノ砥浪山俱利伽羅谷志保山  
加賀ノ篠原軍ニ每度義仲討勝ケレ。知教并平家侍  
共多討シテ總二萬騎ニ討テサレ。惟盛等歸京俊野  
五郎景久齊藤別當實盛モ此戰ニ討死セリ。清房知  
教ハ清盛カ末子ナリ。通盛ハ教盛カ子ナリ。經正ハ經盛  
カ子ナリ。此戰ニ負テヨリ平家大ニ源氏ヲ畏ル。七月  
義仲北國ヨリ攻上リ叡山ニ上テ京都ヲ直下シテ  
平家は是ニ氣ヲノミレ。宗盛等一族主上ヲ守護シ  
禮門<sup>ハ</sup>清盛<sup>ハ</sup>後室<sup>ニ</sup>位<sup>ニ</sup>尼<sup>ヲ</sup>トモナヒ都<sup>ヲ</sup>落テ  
福原ヘ赴ク。知盛ハ都ニテ死ナント怒リケレトモ宗  
盛不從池大納言賴盛公其母池尼賴朝ノ死罪ヲ流  
罪ニ云ナクメレ恩ヲスレサルヨレ。鎌倉ヨリ申シ來ルニ  
ヨリテ一族ヲハナレテ京ニ留ル。其外平族皆行幸  
ニ從テ都ヲ出ツ。時ニ七月二十五日ナリ。法皇ヲモ  
平家取奉リ西海ヘ赴ントシケルカヒソカニ叡山御  
幸ナルニヨリテカチハス攝政基通左大臣經宗右大臣

兼實等百官獻山三登<sub>テ</sub>。法皇ニ謁<sub>シ</sub>奉<sub>ル</sub>二十八日  
法皇都へ還幸。義仲五萬騎ニテ供奉。行家ハ頼朝  
ト不和ナル故。北國ノ合戦ヨリ。義仲ニ屬<sub>シ</sub>。同ク上洛  
セリ。平家ハ福原ニモタ<sub>ニ</sub>ラス。遂ニ筑紫へ落行  
八月。法皇平家ノ官位ヲケツリ。其采地ヲ源氏ニ分  
與へラル。義仲ニハ伊豫國ヲ給<sub>テ</sub>。左馬頭ニ任<sub>ジ</sub>。朝日  
將軍ト稱<sub>ス</sub>。行家ニハ備前國ヲ給<sub>テ</sub>。備前守ト号<sub>ス</sub>  
二人ノ威勢漸振<sub>ル</sub>。同月廿日。高倉院ノ子尊成<sub>イ</sub>即  
位。此ヨリ京田舎<sub>ニ</sub>一人ノ帝<sub>ト</sub>。此ニヨリテ安徳ヲハ  
先帝ト申<sub>ス</sub>

八十二代

後鳥羽院

高倉院第四ノ子。諱ハ尊成母ハ藤原殖子。

七條修理大夫信隆カ娘ナリ。高倉院ニ寵セラレテ。尊  
負尊成二人ノ皇子ヲ生<sub>リ</sub>。壽永二年七月。先帝<sub>安徳</sub>  
西海ニ赴給<sub>フ</sub>ニヨリテ。法皇<sub>後白河</sub> 二人ノ御孫ヲ召<sub>テ</sub>  
對面ノ時。守負ハ五歳ナリシカ。法皇ヲ見<sub>テ</sub>泣尊成ハ四  
歳ナリシカ。法皇ノ膝ニ上<sub>ル</sub>。法皇喜<sub>ビ</sub>。帝位ニ即申<sub>サ</sub>ル  
藤原基通ハ清盛カ婿トモ。都ニ留<sub>ル</sub>ニヨリテ。攝政元  
ノトシ。政務ハ皆法皇ノ沙汰ニテ。都ノ警固ハ木曾左  
馬頭義仲ナリ。九月。先帝豊前宇佐八幡宮ニ行幸。  
平家ハレハラク太宰府ニ落著<sub>テ</sub>。時節ヲ待<sub>テ</sub>。豊後  
ノ緒方三郎維義兵ヲ催<sub>シ</sub>。太宰府ヲ攻<sub>ケ</sub>レハ。九國ニモ  
タ<sub>リ</sub>。且ス先帝ヲ具<sub>シ</sub>奉<sub>リ</sub>。四國へ赴<sub>ク</sub>。豊前柳浦ヲ  
過<sub>ル</sub>時。左中將清經海ニ入<sub>リ</sub>死<sub>ス</sub>。此ハ重盛カニ男ナリ。

阿波民部重能平家ヲ迎へ讃岐國屋嶋二内裏ヲ造ル。此ニヨリテ平家ニバラク安ラカニ住レ南海山陽道ヲウチナロケタリ。十月義仲源義清ヲ將トシテ。兵ヲ遣シテ平家ヲ討シム。備中水嶋ニシテ。知盛并能登守教經等ト相戰源氏討負義清死ス。教經ハ教盛ガニ男ナリ。義清ハ足利ノ族ニシテ。仁木細川ノ先祖ナリ。其後義仲自ラ進發シ平家ノ侍瀬尾兼康ヲ討殺ス。義仲ツバイテ平家ヲ攻ヘカリシヲ。行家カ都ニアリテ威ヲ振ヒ。義仲ヲ讒スト聞テ。急キ上洛ス。行家ハ都ニハタマラス。播州ヘ赴キ。室山ニシテ平家ト合戦シケル。カ行家討負テ。河内ヘ逃行。十一月義仲都ニアリテ。惡逆平家ニ超タリ。法皇怒テ。叡山三井寺ノ僧徒ヲシテ。義仲ヲ討シ。謀ルヨレ風聞シケレハ。今井四郎兼平。イカニモシテ。罪ヲ法皇ヘ謝スヘシトイヘドモ。義仲聞ス。兵ヲ率テ。法住寺ノ御取ヲ攻テ。火ヲ放テ。法皇ヲ五條ノ御取ヘ押籠。天台座主明雲。二井寺ノ長吏圓應。法親王以下。殺サル。者數百人。百官皆カチハタレニテ。逃迷テ。耻ニアフ者多シ。義仲自ラ丹波國ヲ領ジ。前關白松殿基房ノ婿ニナリテ。攝政基通内大臣實定等四十九人ノ官位ヲケツリ。基房ノ子中納言師家纔十一歳ナルヲ。内大臣トシ。攝政セシム。十二月頼朝上総介廣常ヲ殺ス。後ニ罪ナキヲサトリテ。悔シレケルトゾ。

元暦元年正月。義仲征夷大將軍ニ任ゼラル。義仲恣

ニ逆威ヲ振ヒ。法皇ヲナヤミシ。惡逆甚シキ事ヲ關  
東ニテ頼朝聞及テ。其弟蒲冠者範頼。九郎義  
經ニ。六萬騎ヲ添テ上洛シ。義仲ヲ討シム。義仲宇  
治勢田ニテ拒グトイヘトキ。義經ニシタガヘル佐々木  
高綱。梶原景季。宇治川ヲ渡リ畠山重忠相ツキ  
戰勝テ。義經早シ上洛。法皇ノ御取ヲ警固ス故ニ  
義仲都ヲ落テ。勢多ノ邊ニテ。度々合戦シ郎等皆  
討シ。粟津ノ原ニテ。流矢ニ中リテ死ス。歲三十一。今井  
兼平モ一取ニテ討死ス。樋口兼光ハ行家ヲ討ントテ。  
河内ニアリケルガゴレヲ聞テ歸京。降參シケレドモ斬  
罪セラル。同月攝政師家ヲヤメテ。基通又攝政ト  
ナル。平家余木曾カ惡逆ノ間ニ。西國多ク平ケ攝州

谷ニ城ヲ構ヘ十萬人ヲ聚ム。此ニヨリテ。先帝屋嶋三  
リ福原ニテ行幸アリ。近邊ノ武士。源氏ニ志アル者  
ヲハ能登守教經。ゴトクク討平ク。二月。範頼義經  
ニ手ニ分テ。平家ヲ攻ム。義經先ニ草山ニ平資盛等  
ガ陣セシヲ討破リ。谷ノ搦手ヘ向フ。範頼ハ大手ノ生  
田。森ニ向フ。大手ニテ公河原兄弟先陣ニテ討死シ。梶  
原景時其子景季。一度ノ懸ノ軍功ヲハケニシ。搦手ニテ  
熊谷直實。平山季重先陣ニテ。土肥實平相ツケ  
リサレトモ城堅シテヤフレサル取ニ。義經ウシロノ山ヲ  
ハリ。鴨越ヨリ攻入テ。平家ノ陣ヘ火ヲ放ツ。平家大  
ニ敗軍シ。越前三位通盛。薩摩守忠度。備中守師盛。  
武藏守知章。尾張守清定。淡路守清房。皇后宮亮經正。

若狹守經俊藏人、大夫業盛、大夫敦盛、皆討死。二位中將重衡、八生、勇十、九、其餘、郎從等、死。スル者、數ヲ知、ス。或説ニ、能登守教、經モ此戰ニ討レタリト云ヘリ。宗盛、知盛、教盛、經盛、等ハ、纒ニ免テ、先帝建禮門院ニ位、禪尼等ヲトモナヒ、又屋嶋へ趣ク。範頼、義經、歸洛シ、法皇へ奏シ、重衡ヲ關東へ遣ス。三月、平惟盛、屋嶋ヲ出、高野熊野へ入り、那知ノ海ニテ、身ヲシケテ死ス。歲二十七、或ハ深山ノ奥ニカクレ居テ、命ヲ全ストモ云リ。同月、頼朝正四位ニ叙セララル。四月、頼朝、清水冠者、義高ヲ殺ス。其妻ハ、頼朝ノ娘ナリ。貞烈ニテ再嫁セズ。五月、平頼盛、鎌倉君へ赴キ、頼朝ニ對面庄園アテ、夕霞ケラレテ歸洛ス。六月、源範頼、三河守ニ任ス。

八月、義經、左衛門尉ニ任シ。九月、從五位ニ叙シテ、大判官ト号ス。義經ハ都ヲ守護シ、範頼ハ平家ヲ討テ、爲ニ西海ニ赴ク。備前、藤戸ニテ、平行盛ト戰フ。佐々木盛綱、先陳シテ、平家敗北。十月、頼朝、問注所ヲ造テ、大江、廣元ニ善善信等ヲシテ、訟ヲ聽シム。十一月、頼朝、勝長壽院ヲ作ル。義朝カ菩提一所ナリ。南御堂ト号ス。文治元年正月、平家長門、赤間關ニ城ヲ構ヘ、知盛ヲ遣シテ守シメ。九國ヲシタカヘントシ、宗盛ハ屋嶋ニアリ、頼朝、範頼ヲシテ、九國ヲ攻シメ、義經ヲシテ、屋嶋ヲ攻シム。二月、義經出京、攝州渡部ニテ、兵船ヲ聚ム。景時ト逆櫓ノ爭論アリ。大風吹ニヨリテ、諸士出

船スルゴトアタハス。義經纜五艘ヲ率テ。風波ヲ凌  
キ。不意ニ屋嶋へ至テ。内裏ニ火ヲ放ツ。宗盛等先帝  
ヲ奉ジテ海ニ浮ス。教經ヲシテ。義經ヲアセカシム。源  
氏兵佐藤嗣信。鎌田光政等以下。教經ニ射殺サルト  
イヘドモ平氏遂ニ討負テ引退キ。長門へ赴ク。平氏ノ  
侍大將。田内左衛門教能ハ伊豫ノ河野ヲ攻ケルカ。義  
經コレヲアザムキテ降参セシム。義經遂ニ四國ヲ平  
ゲ。長門へ進發ス。平家九國へ逃ントス。範頼豊後ニア  
リテ。其路ヲサキル。三月。廿四日。義經赤間關ニ至  
テ。平家ト合戦。阿波民部重能ハ數年平家へ忠ヲ盡  
シ。此時忽源氏へ降参ス。是ニヨリテ平家敗軍。二  
位。禪尼神璽ヲ持。寶劔ヲ帶シ。先帝ヲイタキ。海ニ入  
テ没ス。宗盛并其子右衛門督清宗及平大納言時忠ハ

虜トナル。知盛教盛。經盛。資盛行盛。有盛。教經皆海ニ入テ  
死ス。建禮門院ハ生虜奉ル。平家悉滅ス。神璽ハ浮ケルニ  
ヨリテ。内侍取トトモニ都へ返入ル。寶劔ハ沈テ失ス。先  
帝ハ三歳ニテ即位シテ。年号養和。壽永。在位合テ  
三年餘六歳ニテ都ヲ出テ。田ノ口ニ二年餘ニシテ。海底  
ニ沈テ。崩御。纒八歳ナリ。四月。義經歸京。賴朝軍功  
ニヨリテ。從二位ニ叙セラル。五月。義經鎌倉へ赴ク。宗  
盛父子ヲ召具シテ。下向。賴朝北條時政ヲ腰越ニ遣シ。宗  
盛父子ヲ受取。義經ヲ鎌倉へ入ス。義經軍功ニ誇リ。自  
擧ノ心アリ。賴朝ノ旨ニカハサルコト。モ多キニヨリ  
テナリ。又景時カ讒言トモ聞ユ。六月。賴朝宗盛父子

ヲ義經ニワタシ。腰越ヨリ歸京セシ。源賴兼之レテ。重  
衡ヲ具セシメテ。奈良ニ赴シ。義經近江、篠原ニテ。宗  
盛父子ヲ斬ル。宗盛ハ二十九歳。清宗ハ十七歳ナリ。重衡  
父奈良ニテ斬ラル。南都ヲ燒ニヨリテ。如是。八月義經  
ヲ伊豫守ニ任メ。京都ヲ守護セシム。十月賴朝土佐  
房昌俊ヲシテ上洛セシメ。義經ヲ討シム。事成ス。シテ。昌  
俊殺サル。賴朝自上洛シテ。義經ヲ討シトス。十一月  
義經其叔父行家ト。賴朝追討ノ院宣ヲ強テ申請テ。  
京ヲ出テ西國ニ赴カントス。大物ノ濱ニテ風ニアフテ。チ  
リ。くニナリ。義經ハ吉野多武峯方々ニカクレラル。賴朝  
奏シテ院宣ヲ賜リ。尋求メシム。レドモ。遂ニ見出サス。  
同日。賴朝駿河、黃瀬河ニテ出馬セラレ。ルカ。義經行

家。テニ都ヲ落ルト聞テ。鎌倉へ歸リ。後。條時政ヲシテ上  
洛セシメ。都ヲ守。平氏ノ餘黨ヲ尋求。惟盛カ子六代。平氏  
ノ嫡流ナレトモ。文覺カワヒ言ニヨリテ赦免セララル。賴朝  
又土肥、實平等ヲ。西海へ遣シ守シム。賴朝時政ヲ以テ  
奏聞シテ。諸國ノ総追捕使タラント請フ。法皇許容セ  
ラル。此ヨリ賴朝諸國ニ守護ヲマキ。庄園ニ地頭ヲシ  
テ。六十餘州皆武家ノ下知ニシタカフテ朝廷日々ニ  
衰フ。十二月。賴朝執奏ニヨリテ。右大臣藤原兼實  
内覽ノ宣旨ヲ蒙ル。  
二年正月。法皇六十。筭ヲ賀ス。三日。攝政基通ヲマメ  
テ。右大臣兼實ヲ攝政トス。基通ハ近衛殿ナリ。兼實ハ  
九條殿ナリ。是ヨリ一流カハル。執柄タリ。賴朝心ヨ



リ出タルナルヘシ 同月時政鎌倉ニ歸ル 四月法皇  
小原ニ御幸。建禮門院ヲ訪ル 五月左馬頭藤原  
能保軍兵ヲ遣シ。和泉國ニテ行家ヲ殺ス。能保公頼朝ノ  
姉ノ夫ナリ。故ニ頼朝ヨリ此人ニ武士ヲ添テ都ノ守  
護タラレム 八月西行法師鎌倉ニ至テ頼朝ニ對面  
シ。倭歌弓馬ノ事ヲ談ス。西行ハ秀衡ガ一族ナリ。元ハ  
鳥羽院ノ北面ナリレカ。道世シテ。京田舎經歷セリ  
十月兼實右大臣ヲ辞ス。内大臣實定右大臣トナル。兼  
實ノ子。大納言良通内大臣トナル 十二月主上始テ  
孝經ヲ讀

三年二月義經潛伊勢。美濃ヲ歷。北陸道ヨリ奥州ニ  
赴キ。秀衡カ許ニ居ス 四月僧榮西宋朝ニ赴ク

同月僧重源ヲシテ。東大寺大佛造營ノ材木ヲ采ル  
法皇頼朝共ニ心ヲ同シテ再興マ。五月頼朝閑院ノ  
内裏ヲ造ル。大江廣元ヲ上洛セシメ。奉行トス 八月  
洛中盜起ル。鎌倉ヨリ千葉常胤。下河邊行平上洛  
シテ。此ヲ平ク 十月鎮守府將軍陸奥守藤原秀  
衡卒ス。其子泰衡等ニ遺言シテ。義經ヲシテ。國務ヲ行  
シ。十一月石清水賀茂行幸  
四年正月興福寺上棟。攝政兼實等以下行向フ  
二月内大臣良通薨ス。歳二十 三日勅使ヲ奥州ヘ  
遣シ。泰衡ニ命メ。義經ヲ討シム 七月頼朝ノ嫡子頼  
家始テ鑑ヲ著ス  
五年正月頼朝正二位ニ叙ス 二月大炊御門左大臣

藤原經宗薨ス。歲七十一。三月、賴朝奏聞シテ、泰衡ヲ討ント申ス。勅許ナシ。四月、大納言藤原朝方、三位藤原賴經、大藏卿高階、義經等、義經ニシタレカリシ廷臣、或ハ流罪、或ハ解官セララル。吉田中納言藤原經房ト云レ入。賴朝ニ志ヲ通シムツミレキユヘ諸事、此人ヲ以テ奏聞ス。閏四月、泰衡、父カ遺言ニ背キ、勅命ニ從ヒ、賴朝ノ威ヲ恐レシテ、義經ガ居ケル衣河館ヲ攻ケレバ、義經シバラク戰テ、妻子ヲ殺シテ、其身モ自害ス。年三十一。泰衡其首ヲ鎌倉ヘ送ル。泰衡ガ弟忠衡ハ、義經ト同志ナリケルユヘ、泰衡コレヲ殺ス。然レトモ、賴朝ノ怒解ズシテ、泰衡ヲ討ンタメ、軍勢ヲ呼アツム。朝廷ヨリ制シ止ラレトイヘトモ、賴朝從ヒ奉ラス。七月、德大寺右大臣實定

ヲ左大臣トス。二條内大臣實房ヲ右大臣トス。花山院大納言兼雅ヲ内大臣トス。同月、賴朝、諸國ノ兵ヲ三手ニ分テ、奥州ヲ征伐ス。賴朝ハ東山道ヨリ進ム。畠山重忠ヲ先陣トス。千葉介常胤、八田知家ハ東海道ヨリ進ム。比企能負、北陸道ヨリ進ム。二善、善信、佐々木經高、大庭景能ヲ鎌倉ノ留守トス。泰衡、平泉館ヲ出テ、國分原ニ陣ス。阿津賀志山ニ城ヲ構テ、兄國衡等ヲシテ守シム。八月、賴朝、白河關ヲ踰テ、伊達郡ニ到リ、阿津賀志城ヲ攻破。和田義盛、矢ヲ放テ、國衡ヲ射倒ス。重忠ガ郎從、其頭ヲ得タリ。其後、處々合戰。賴朝、每度勝利ヲ得タリ。常胤、知家モ東海道ヨリ來會ニ比企能負、北陸ヨリ出羽ヘ入テ、泰衡ガ家人等ヲ討殺ス。賴朝大軍ヲ

率<sup>ヒ</sup>テ平泉ヲ攻カコム。泰衡館ヲ焚<sup>ケ</sup>テ深山へ逃<sup>レ</sup>入賴朝兵  
ヲ分<sup>テ</sup>テ尋求シム。九月泰衡夷狄嶋へ逃<sup>レ</sup>往<sup>ル</sup>トス。其  
下人河田次即コレヲ殺<sup>レ</sup>テ降<sup>ル</sup>參ス。泰衡カ弟俊衡季  
衡高衡モ皆降參ス。陸奥出羽悉平ク。此時賴朝ノ從軍  
上下合<sup>テ</sup>テ二十八萬四千八十人ナリ。清衡ヨリ基衡秀衡  
ヲ歷<sup>テ</sup>テ泰衡ニテ四代百年ニ及ブユ。其タクワヘツヌル  
財寶多シ。賴朝皆諸士ニ分<sup>テ</sup>テ了<sup>ラ</sup>タフ。兩國ノ郡卿ヲ分<sup>テ</sup>  
戰功ヲ賞<sup>シ</sup>。葛西清重ヲ奥州ニ留<sup>リ</sup>居<sup>レ</sup>シム。十月賴  
朝鎌倉へ歸ル。十一月春日行幸。十二月攝政兼實  
太政大臣ニ任ス。

建久元年正月。天皇元服兼實娘任<sup>シ</sup>子女御トナル。其後  
中宮トナル。同月泰衡カ家人大河兼任ト云モノ。奥州ニ

ニ其黨ヲアツクテ蜂起<sup>ス</sup>。或ハ義經ト稱<sup>ス</sup>。或ハ清水冠者ト  
稱<sup>ス</sup>。郡縣ヲ掠<sup>ル</sup>。賴朝足利上総介義兼ヲ追討<sup>シ</sup>使<sup>テ</sup>  
ト千葉介常胤比企能負等ヲ相副<sup>シ</sup>ニ兼任ヲ討<sup>シ</sup>シム。  
二月數度合戰。三月兼任敗<sup>レ</sup>逃<sup>ケル</sup>ヲ栗原寺ニテ  
樵夫斧<sup>ニ</sup>ミテコレヲ討<sup>コ</sup>ロス。四月兼實太政大臣ヲ  
辞<sup>ス</sup>。七月賴朝一品房昌寬ヲ京へ遣<sup>フ</sup>。新館ヲ六  
波羅ニ造<sup>ル</sup>。實定左大臣ヲ辞<sup>シ</sup>實房左大臣ニ轉<sup>シ</sup>。  
兼雅右大臣トナリ。大納言藤原兼房ヲ内大臣トス。  
兼房ハ兼實ノ弟ナリ。十月賴朝上洛重忠先驅<sup>タ</sup>  
リ。常胤殿後タリ。時政鎌倉ニ留守タリ。尾張野間  
ニテ長田忠宗ヲ誅<sup>ス</sup>。十一月賴朝京著<sup>ル</sup>。六波羅  
ノ新館ニ入<sup>テ</sup>居<sup>ス</sup>。入洛ノ行粧ユレキ体ナリ。法皇密

ニ見物セララル頼朝参内院参大納言ニ任ス上上へモ法  
皇へモ様々ノ進物アリ。其後頼朝石清水へ参詣太刀  
馬ヲ献ス。此時花山院右大臣兼雅右大將ヲ辞ス。頼朝  
ヲレテ右大將ヲ兼シメラル。十二月頼朝参内院参大  
納言右大將ヲ辞シテ鎌倉へ歸ル。

二年正月頼朝政務ノ沙汰アリ。大江廣元政所ノ別當  
タリ藤原行政令タリ。鎌田俊長案主タリ。中原光家知  
家事タリ。三善善信問注所執事タリ。和田義盛侍所  
別當タリ。梶原景時侍所司タリ。藤原親能藤原俊兼  
三善康清三善宣衡平盛時中原仲業清原實俊ヲ公  
事奉行トス。此外京都ノ守護ハ中納言藤原能保十リ。  
鎮西ノ奉行ハ天野遠景十リ。二月能保檢非違使ノ

別當ヲ兼頼朝ノ好ヲ以テ権威ヲ振フ

三月鎌倉

朝ノ錦鷲岡ノ宮田祿ス皆是ヲ新營ス内大臣兼房大

政大臣ニ任ス中山大納言藤原忠親ヲ内大臣トス

四月僧榮西宋ヨリ歸朝始テ禪宗ヲ弘ム。十月法

皇ノ御取法住寺ヲ造ル。頼朝廣光親能等ヲレテ奉

行タラシム。十二月兼實攝政ヲ辞シ關白トナル

閏月徳大寺前左大臣實定薨ス。歳五十三

三年正月平家ノ侍上総五郎兵衛忠光潛ニ鎌倉ニ

カクレ居テ頼朝ヲ子ラフ。此比末福寺ノ新御堂造

營。頼朝監臨ノ時忠光魚鱗ヲ以テ左ノ眼ヲラホフテ。

眇者ノマ子ヲシ。懷ニカヲカクレ入夫ノ中ニ紛居ケル

ヲ。頼朝アヤレシニ。景時ヲ以テ尋問テ捕ケル。其名ヲ

白狀ス。即チ義盛ニ渡シテ。同類ヲ尋問テ斬罪ス。  
三月後白河法皇崩ス。歲六十七。在位八纒三年。三十二  
條。六條。高倉安徳。當代ニテ。院中ニテ。政務ヲ沙汰スル  
コト。四十年ハカリ。其間保元乱後。信賴清盛。義仲ニ  
ナヤマサレ。賴朝ノ功ニテ。暫ク安穩トイヘトモ。朝廷ノ政  
武家ヘウツルコトハ。此時ヨリ始レリ。七月主上始テ  
政ヲ自ラ執行ス。賴朝ヲ以テ征夷大將軍トス。勅使中  
原景良。泰定。宣旨ヲ持シテ。鎌倉ヘ下向。賴朝ニ浦介義  
澄ヲシテ。鶴岡ノ廟庭ニテ。其宣旨ヲ請取シム。八月  
賴朝。次男實朝。生ル母ハ賴家ニ同シ。  
四年四月。賴朝。那須野ニ狩ス。五月。賴朝。駿河ノ藍  
澤ニ狩ル。其ヨリ富士野ニ到テ。卷狩アリ。此時。曾我十郎

祐成。其弟五郎時宗。夜潛ニ工藤祐經ガ宅ニ入テ。コレヲ  
殺シテ。父ノ讐ヲ復ス。其ヨリ。賴朝ノ旅館ニ乱入テ。十人  
バカリヲ刃傷ス。夜中俄ノコトナレハ。大ニ騷動ス。仁田忠  
常ニ逢テ。祐成ハ討シス。時宗ハ櫓進ニケレハ。賴朝自ラ出  
ントス。大友能直コレヲサヘト。ムル間ニ。五郎丸ト云大  
カノ者。時宗ヲ擄捕ル。賴朝直ニ其子細ヲ尋問テ。赦ント  
ス。祐經ガ子ノ申請ニヨリテ。時宗斬罪。抑祐成ガ父  
ヲ。河津祐泰ト云。祐泰ガ父ヲ。伊東祐親ト云。祐經ガ父  
死ル時。幼少コヘ。祐親一族ノ好ニヨリテ。其領地ヲ預リ  
ケルガ。祐經成人ノ後。タカヒニ申分マルニヨリテ。祐經其  
怒リヲ祐泰ニウツシテ。潛ニ祐泰ヲ殺シテ。已レ知サル様  
ニシテ。居ケレトモ。祐成時宗漸ク成長シ。父ノ仇ナルコト

ヲ知テ。兄弟志ヲ同シテ。年々窺ヘトモ。志ヲ遂ス昔頼  
朝流人タリシ時。潛ニ祐親カ娘ニ通シテ。一子ヲ生シ。祐  
親平家ヘキコヘシコトヲ憚テ。其娘ヲ奪ヒ。其子ヲ殺シ  
頼朝ヲモ害セントス。頼朝コノ恨アルニヨリテ。祐親死  
シテ後モ。其子孫皆沈淪セリ。祐經ハ頼朝近習ノ寵臣ト  
ニヨリテ。時ヲ得サリシガ。今度幸ニ本望ヲ達シ。又祖父祐  
親ガ遺恨アルニヨリテ。頼朝ノ館ヘモ乱入セリ。祐成時ニ  
二十二歳時宗ハ二十歳ナリ。初祐泰死ニ後其妻曾我  
祐信ニ嫁ス。故ニ祐成時宗共ニ繼父ノ氏ヲ冒セリ。祐信モ  
此時狩場ノ供奉シケルヲ。頼朝召テ。二人ノ追善ヲ修セシ  
ム。七月横山時廣。淡路ノ所領ニ産スル由ニテ。九足ノ  
馬ヲ。頼朝ニ獻ジケシ。奥州外濱ニ放遺サル。八月參河

守範頼謀叛ノ志アル由ニテ。頼朝尋問ケシ。起請文ヲ  
以テ。異心ナキ由ヲ申トイヘトモ。許容ナク。宇佐美祐茂  
狩野介宗茂ニ預ケテ。伊豆ノ國ヘ配流セララル。或説ニハ。曾  
我兄弟ガ夜討ノ時。頼朝モ安否イカト風聞ニヨリテ。鎌  
倉騷動ス。範頼ハ留守セラレシガ。人ノ心ヲ安センタヌニダ  
トヒ不慮ノ事アリトモ。範頼カクテアシハ。心安カルベシ  
ト申サル。是ニヨリ頼朝ノウタカヒアリトイヘリ。配流ノ  
後終ニ誅セラレケルトナシ。其家人等。範頼ガ其館ニ籠  
居ケルヲ。梶原父子。并結城七郎朝光等ヲシテ。討平  
ゲシム。朝光ハ小山朝政ガ弟ナリ。頼朝ニ仕テ近侍セリ  
十二月頼朝神馬ヲ尾張ノ熱田ノ社ニ獻ス。相模守源  
惟義奉幣使タリ。頼朝ノ母ハ熱田ノ大宮司季範カ娘ナリ。

五年三月益内裏ヲ燒ントス大内守護源頼兼コレヲ  
捕テ誅ス 八月安田遠江守義定謀反アラレテ殺  
サレシ八甲斐源氏ニテ頼朝出張ノ初ヨリ忠アリテ範  
頼義經ト同ク平家ノ討手ニ加ハリ軍功アリテ遠江  
國司ニ任セラレ其子義資女色ノ事ニヨリテ景時ニ訟  
ラレテ斬罪ニ處セラレ義定モ其縁坐ニヨリテ所領没  
収セラレコレニヨリテ恨ヲフクニ逐ニカクノゴトシ  
九月興福寺供養關白兼實以下藤原氏ノ公卿皆  
參向ス頼朝劔并神馬ヲ伊勢大神宮へ奉納ス  
六年二月頼朝上洛東大寺供養ノ爲ナレ其妻平政  
子モ嫡男頼家モ同ク入洛 三月東大寺供養主上  
行幸百官皆供奉頼朝モ參詣馬十疋米一萬石黄金

千兩緋千疋東大寺へ施入ス武士ヲシテ四門ヲ  
闢シム武士ト衆徒ト相論ノ事アリ結城朝光是ヲ  
レツメテ无事ナリ供養畢テ還幸頼朝參内 同月  
中山内大臣忠親薨ス此人ノ作レル記録ヲ山槐記ト  
云水鑑モ此人ノ作ナリ 四月頼朝京中ノ寺社ヲ巡  
見ス勅使中納言藤原經房六波羅ノ館ニ來テ頼朝ト  
朝政ヲ談ス 五月頼朝參内關白兼實ト朝政ヲ議  
ス 六月頼家參内 同月頼朝頼家政子皆鎌倉  
ニ歸ル 十一月大納言藤原良經内大臣トナル兼實  
ノ次男ナリ良經ノ室公能保ガ娘ニテ頼朝ノ姪トナリ  
七年四月三條左大臣實房官ヲ辞シテ剃髮  
十一月兼實關白ヲヤメテ近衛前攝政基通關白トナル

同月藤原兼房太政大臣ヲ辞ス

八年四月主上七條院（行幸アリ）御母殖子ニ觀ス

十二月源頼家從五位ニ叙シ右中將ニ任ス

九年正月主上位ヲ御子爲仁ニ讓ル太上天皇ノ尊

号ヲ奉ル 年号元暦二年 文治五年 建久九年

在位合テ十五年



